
In The Material ?=? Another World

伊墨雄弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In The Material ? II ? Another
World

【Nコード】

N1475N

【作者名】

伊墨雄弥

【あらすじ】

死んだはずの御神哀。

しかし、目覚めたそこはなんと魔法が飛び交うファンタジーな異世界！？

その元からある、訓練された最強超能力と、これから覚える魔法を駆使し、敵をなぎ払う！

いつかはきっと元の世界に戻る事を祈って…………。

これは、『In The Material ?』の続編です。

これから読むと、理解不能になるかもしれません。
けどやっぱり大丈夫だと思います。

もし良かったら、前作も見てくださいといいです。

2タグの、『R15』は、一応です。

お知らせ（前書き）

遂に！

お知らせ

皆さんこんにちは。伊墨雄弥です。

やっと！ やつとお！

？がです！

人気ないのに続編だします！

いくら読者が少なくとも、私は暴走して書き続ける！

感想を見て、やはり、ファンタジーな異世界にトリップするのが良いと

分かりました。

ですが、もしかしたら、お馴染みのあのキャラクターがでるかもしれません。

まあ、これからも、『マテリアルの中で』をよろしくお願いします。

魔法について、

私は、そういうネタはもしかしたら苦手かもしれないので、何かあったら感想で伝えてください。

まあ、魔法がでるのは後々になりそうですが……………。

第一話 異世界

「う……」

頭が痛い。

そのせいで起きてしまった。

ここは……

「知らない天井だ。というか木」

そう。

ゆっくりと起きた俺が最初に見たのは木の枝。

「俺は……何を？　ここは……何処だ？」

確か俺は本部で、ホムンクルスに………ッ！」

勢い良く起きて、辺りを見回す。

しかし俺の記憶では此処は本部のビルの筈だった物が、なぜか森になっていた。

しかも唯の森ではなく、ひと目でジャングルだと分かるような森だ。

「此処は、何処だ？　ホムンクルスは？
それに………」

脳裏に浮かぶ皆の顔。

皆は無事なんだろうか？

だが、なぜ俺がここに居るのか分からない。

俺の記憶では、確かに俺は………『死』を覚悟した。
どうしようもない運命に身を任せた。
なのに、現に俺は生きている。

しかもここが何処だか分からない。
とりあえずここは日本ではない。

まあ、南米かアフリカぐらいだろうが。

多分、何か空間干渉系の能力で飛ばされたのだろうか？
なら時間は？

俺は右腕にある時計を見る。
しかしその時計は止まって、動かなくなっていた。

手がかりがまったく無い、ということに焦り始めたその時、それは
でてきた。

後ろの葉がガサガサと音を立てる。
誰か人か？と思いそちらを向くが、そこに居たのは人ではなかった。

それは、大きな狼だった。
そうとしか言いようが無い。

だがその大きさが尋常じゃない。

それは、ゆうに全長10mを超える化け物な狼。
その灰色の毛は鈍く光沢を放ち、その鋭く紅い双眸は、こちらを視
界に入れて離さない。

「……これはアフリカでも南米でもないな」

確かに、この狼の殺気は十分だが、ホムンクルスに比べたらまだまだ甘い。

10mの狼？なにそれおいしいの？な感じた。

……ここに飛ばされて？ちょっとストレス溜まってるし……

「すまないけど」

巨大狼に、風の力で一瞬で近づき、そしてその頭に触れて能力発動。

能力発動。対象、狼。

効果、破壊。

その瞬間、バンッ！！と大きい破裂音が森の一角に響いたかと思うと、

狼はその頭を破裂させて、一瞬で絶命した。

「食料確保だな。今この状況が良く分からないから取りあえずは森から出るか」

そう思って、歩く。歩く。歩き続けた。

因みに狼を、作った袋に入れて担いで、
だが、

「ここどこだよ……」

森の中を、一直線にずっと歩き続けた結果、こうなった。

別に、迷った分けではない。

逆に、森から出たとも言える。

なのに今日の前に広がっている光景は、あまりにも信じられないものだった。

森から抜け出た所は、周りが見渡せる平原だった。

だが、それと同時に目に映ったのは、空。

しかしその空は、蒼く、そしてその蒼く深い空には、紅い満月と紫の満月が浮かんでいた。

「これ、地球じゃ、無い？」

どう見てもこれは地球ではない。

ならここは？

その様な思考の渦に陥ってる時、ふと目の前を見ると、そこには人がいた。

しかしそれは、まあ俗に言う（俺から見ると何時の時代のものだよ）山賊の格好をした者達だった。

そいつらは突っ立ってる俺の周りを取り囲む。

するとそいつらは口々に言う。

「見ろよコイツ、あの服見たことねえぞ。高く売れるぜ！」

「すげえ上玉だあ！ 最初は俺にやらせろ！」

「まあ、覚悟しときなお嬢さん」

とか色々言ってる。

因みに、お忘れの方もいるかもしれないが、

俺、御神哀は、初見の人にはよく女と間違えられる容姿と髪型をし

ている。

まあ、そう言った奴には制裁とかその他諸々を加えてるから、二度目からは間違えられない。

つまり、

「てめえら……俺は、お、と、こ、ッだぁー……！」

〈十分後〉

「すみませんでしたぁー！」

ハモリすぎて、一人の声みたくなってる謝罪を土下座と共に受け取る。

「まあ良いよ。それより、教えて欲しい事がある」

「なんででしょうか！」

その後、山賊？に話を聞くと、

ここはシュラウトと呼ばれる国で、ここから数キロ北に行くと、首都があるらしい。

その後も色々聞いてみるが、驚く内容ばかりだった。

この世界には魔法が存在しており、俺の持っている科学の常識は通用しない。

……つまりここは、俺のいた地球がある世界ではない、という事だ。

ヌ
ジ
?

第一話 異世界（後書き）

主人公の性格が変わってるって事は気にしないで下さい。

第二話 ギルド（前書き）

やっぱりファンタジーに来たらギルドですよ。

第二話 ギルド

俺は襲ってきた山賊から、この世界の通貨を貰い、山賊達とオサラバした。

その後、風を操り、空に飛び上がった後、北に向けてゆっくりと飛んで行った。

しかし、どうにもゆっくりすぎると思い、少しペースを早めると、ものの数秒で街が見えた。

「あれが首都か……」

空中から地面に降り、歩いて街門に行く。

空から飛んでいくと無闇に警戒されるからな……。

俺はそのまま街に入れた。持ち物検査とかも無く、しかも親切にギルドの場所まで教えてくれた。

ギルド、というのは……もう分かってる人もいるだろうが、つまりは依頼委託所？だ。

依頼主がギルドに依頼を委託し、冒険者諸々が金と引き換えにその依頼を遂行していく、といったものだ。

因みに、俺が行く理由は、

確かにまずはギルドで金を稼いでからじゃないと話にならない、と思ったのも事実だ。

帰るための情報なども、それまでの生活費も、全て金が無いと話にならない。

それとも一つ。

これも金絡みなのだが、俺が倒した巨大狼は、頭が無くなったままでそのまま後ろの袋に入れ、担いでる。

これらは魔物と呼ばれ、その体から剥ぎ取れる素材は武器防具の良材料になるんだとか。

そしてその素材を売れるのが、ギルド、という訳だ。

それにしても随分賑やかな街だ。道行く人々にはジロジロ見られる。

まあ、この世界は本当に、ゲーム等のファンタジーと一緒に、町並みは中世ヨーロッパに近く、服装も、ファンタジー系のもので、

その中に俺の、黒い自衛隊制服みたいな奴が居たら目立つだろう。

俺は今、街門からギルドまで一直線に続いている道を歩いている。人は多く、首都だからか、活気がある。

道の両端には、露天商が所狭しと並んでいる。

果物屋から武器屋まで様々だ。

この街の形は面白い。

簡単に説明すると、

某鋼が主役の物語の中の、首都の形で、中心に王族が住まう巨大な城が建てられている。

門は複数あり、それぞれから一直線に城へ向けて道が伸びる。

そして、その複数の門から、更に、ギルド、兵隊駐屯所、アイギス魔法学園に、道が伸びている。
しかもその道が非常に複雑且つ綺麗で、本当に練s……魔方阵のよ
うな形を取っている。

アイギス魔法学園というのは、
このシュラウト王国の中でも一番大きい魔法を教える学園なんだそ
うだ。

そこを卒業したものは、
王族近衛隊か、王族親衛隊、もしくは小隊、大隊を率いる幹部にな
る事が多いらしい。

近衛隊はそのまんま。
親衛隊は、近衛隊の上位版。
こんな感じだ。

因みにこの情報はとても有名で、いくら山賊、海賊、浮浪者でも知
っている常識らしい。

と、そんな事をおさらいしてたらもうギルドに着いた。

ギルドは、いかにも、『猛者達が居ます！』といってるような出で
立ちで、
入りにくいが、まあそんな事構わず入る。

中に入ると、以外と女、子供も居て驚いた。
ギイと扉が音を立てたので、殆どの野郎はこちらを向いてくる。

それを無視し、『素材取引所』と書かれている窓口へ行く。

するとその受付嬢がこちらに気付き、ニツコリと作り笑いを浮かべて言う。

「いらっしやいませ。今回は素材取引ご利用で良いですね？」

「ああ。ギルドカードとやらを作っていないんだが良いか？」

ギルドカードとは……これも分かる人は居るだろう。つまり、免許証、いや、証明証といったものだ。そこには自身のプロフィールとランクが記される。

ランクは、E〜Sまであり、それぞれ受けれる依頼の難易度が違う。因みにSランクは世界に五人しか居ないとか。

これは受付嬢からの知識。

「すみませんが、ご利用の際はカードが必要になります。こちらでも作れるので今作りますか？」

「……分かりました。ではお願いします」

「ではまず、名前を」

「アイ・ミカミです」

「変わった名前ですね……っと、失礼。では、次ですが………」

そのままいくつか簡単な質問をされて、ギルドカードができた。

因みに途中で、性別男って言って、驚かれたのは気にしない。

「これでできました。最初はEランクからになります。自分のランクを20個達成すると、Dランクに上がれます。するとどんどんノルマが高くなってきます。

一つ上の依頼ならその半分で良いです。

そして二つ上なら一回。

三つ以上ならそのランクにそのまま格上げとなります。

よろしいですね？」

「ああ」

「では、早速ですが魔物の部位を……」

「これだ」

俺はそう言って、後ろの袋の口を開け、逆さまにして、巨大狼頭無しを受付から見える床に落とした。

因みに10mもあるので袋を相当な大きさなのだが。

その死体は、床に落ちて、床をベキツと鳴らせたが気にしないでおこつ。

前を再び向くと、受付嬢はその顔を真っ青にして、後ずさりし、次の瞬間、

「ギルドマスターーーーーー！ 大変ですーーーーー！」

と大声を出しながら、受付より向こうにある扉から勢い良くでていった。

.....俺、また何かしたかな？

第二話 ギルド（後書き）

主人公の喋りが少なくなってる気が……

第三話 養子（前書き）

話が短いのは勘弁して下さい……

第三話 養子

受付嬢が大声出して奥の部屋行ってから、また戻ってきて、今はその人に連れられて、この建物の一番上に来ている。

それで、今、前に一人の中年のおじさんが座ってる。

この人がギルドマスターかな？

「あの？ あなたは誰ですか？ それに俺は素材引き換えしに来ただけなんですけど」

するとこちらを見ていたその人はハア、と溜め息をついてから言う。

「君があ狼を倒したのか？」

「はい。あっさりと、でしたけど」

「……あれはな、」

まさか、ファンタジーによくでてくる神獣とかじゃないかな？

「あれは、フェンリルと言われて恐れられる、この世界で最上位に位置する魔物の一つだぞ？

なのになぜギルドカードも作らないお前が倒せる？」

……その逆だった。
さてどう誤魔化すか……。

「いや、運が良かったんですよ。丁度寝てる所に出くわして、

そのまま頭に攻撃したら、倒せただけです」

「……そんな見え透いた嘘を言うなど、訳アリか？」

完全にばれた。

けど別に、この人はなぜか大丈夫なような気がする。

この人なら、俺が別の世界から来た事を教え、協力してくれそうだと思う。

「……これから話したい事は、他の人には聞かれないのですが」

「ああ、少し待て。………良いぞ。これで部屋の外には一切聞こえない」

「ありがとうございます。」

それで、話したいというのは……」

俺はそれから、ギルドマスターに、俺の事を全て話した。

俺が異世界？から来た事。

超能力の事。

向こうであつた戦闘の事。

大切な人の為に戻らなければいけない事。

その戻り方について、捜すのを協力して欲しい事。

俺がここまで打ち解けたのは、多分この人の雰囲気
が総隊長さんに似ていたからだと思う。

別に、顔とか声、喋り方が似てるとかじゃない。

ただ、総隊長さんもそうだったけれど、何か父親の様なものを持つてると感じられた。

案の定、ギルドマスターは俺の話を感じてくれた。

「まあ、お主の服装と、その、超能力？を見せられたら信じるしかないまい」

「ありがとうございます……」

……傲慢なのは分かっています。ですが！
どうか、元の世界に戻る方法を探すを手伝って下さい！
お願いします！」

目一杯の礼をする。
するとギルドマスターは、

「ハッハッハ！ 恋人の為に戻ろうとするその意気や良し！
良いだろう！ お前は私の養子になれ！

私が養ってやるがその代わり！

元の世界に戻る方法を見つけるまでギルドで働け！

依頼の報酬は貰って良い！ 朝飯夜飯と二食付いて、寝床も用意してやる！」

「え……………えっと、その、

あ、ありがとうございます！！

俺、ギルドの為に、元の世界に戻る為、頑張らせてもらいます！」

純粹に嬉しかった。

まだ会って間もない俺の、この世界の住人からしたらふざけた話を信じてくれ、

そして俺を養子として面倒を見てくれるなど、本当に、嬉しかった。

「でも……」

「ん？」

「あのデカぶフヘンブルつって、どうなるんですか？」

「……考えてない」

第三話 養子（後書き）

主人公の性格がまったく違って良いほど変わってるのは
気にしないで！

お願いします。

俺は今、文才の無さで自分を責め、

自分自身で「俺のライフはとくにゼロよ！」状態になっています。

第四話 魔力の説明（前書き）

今回は魔力の説明です。

第四話 魔力の説明

結局、フェンリルは、確かに売るとしたら莫大な資産が築けるらしいが、

マスター（ギルドマスターの略）の薦めで、確かに必要ないのだが、持ってないと怪しまれるので、武器と防具、の材料にする。

フェンリルの皮は、昔に、マスターが幼少の頃一回だけ見たことがあるらしい。

それはとても良い武器防具の材料となるらしい。

そしてそれと同時に、

まあ予想はしていたが、俺はランクEから一気にランクSになってしまった。

因みに、ランクSはランクの中でも特別で、その個人情報ば明かしではならないらしい。

なぜなら、ランクSという事で、確かに味方も増えるが、それと同時に敵も増える、という事だ。

なので、基本的にランクSの人間は一般人に正体を明かしてはいけならしい。

で、もうカードは更新した。

今はマスターの家に居る。これも豪邸だが……。
そして、マスターの書斎に来ている。

「で、用とはなんですか？

それとも、依頼がもう来たんですか？」

「まあそう焦るな。何か手がかりがあつたら私から言う。それより、今日からアイには、魔法を覚えてもらう」

「魔法、ですか？」

しかし俺は魔法など無い異世界から来たんですよ？
そんな俺が魔法を使えるのですか？」

「それに関しては大丈夫。

私にはアイの膨大な魔力が見える」

「膨大、ですか？」

「そうだ。

なぜかは知らんが、君は超能力？を無視しても普通にランクS級の魔法使いだよ」

「そうですか。ですが、俺には超能力があるんです！
今更魔法を覚えるのも……「君は今のままで良いのかな？
ホームクルスとやりに負けた時のまま帰っていいのか？」
……それは……」

「エゴだよ、それは」

「ッ！ ……………」

「君は、大切な人が待っている、と言ったね？」

「はい……」

「それなら、今の君にできる事は、いや、やりたい事な何かな？」

俺がやりたい事、それは、

向こうの皆を護る事。

もう二度と、傷つけさせない程強く、強くなる事。

「君のためにも、魔法は習得しておきなさい」

「……ありがとうございます」

「いや、私は何もしていない。これは君の意思だ。

……それより、魔法を教えよう。

着いてきなさい！」

そう言うと、マスターは書斎の後ろにある扉を開ける。

するとその部屋の中には地下へ続く階段があり、マスターはそこを降りていく。

俺も急いでついてく。

しばらく降りるとまた扉がある。

マスターはその扉をゆつくりと、開ける。

「ここが……私がまだ君の様に若い頃に魔法の修行をした部屋だ」

中は、とても広い。

多分、部隊の訓練場くらい広いと思う。

その中央に行き、マスターが振り返る。

「まず、魔法の基礎だ。
魔法の元は魔力、これは分かるね？」

「はい。それくらいなら……」

「魔力にはまず、外的魔力、内的魔力に分かれる。
これらは文字通りだ。」

内的魔力は、元来人の体に生まれた時から備わっているもので、その量は先天的だ。

なので、いくら特訓してもまったく上限は変わらない。

これは体から自然にあふれるもので、普通に生活していれば普通に魔力は回復する。

内的魔力を完全に失うと、意識不明、最悪の場合は死ぬから気をつけろ。

外的魔力。

これはこの世界に元々あるもので、内的魔力が宙に舞っているものと同じと置いていい。

しかしこれらは、人には絶対に取り込めない。何故かは知らんが、だがなぜこれを教えたかという点、

この外的魔力は、上級魔法、まあこれは後で説明する、以上の魔法を使う時、内的魔力に

プラスし、補助する役割を担うんだ。

その他には、身体の一部に集め、体術を強くしたりする事もできる。

少し長かったけど分かったかな？」

「……はい、なんとかですけど分かりました」

「そうか、じゃあ次は……………」

憶える事多いな……

第四話 魔力の説明（後書き）

魔法の説明は長くなるので、次回を丸ごと使いたいと思います。

第五話 魔法の階級と属性（前書き）

タイトル通りのもの説明しただけです。

第五話 魔法の階級と属性

「次の説明は、魔法についてだ。

魔法は、まず大まかに、『初級魔法』、『中級魔法』、『上級魔法』の三種類がある。

本当はこの三つの種類の他にも、『禁忌魔法』と『神気魔法』があるが、

これらは、はっきり言うと、使える奴が居ない。

Sランク保持者でも、『禁忌魔法』を使うと一発で死ぬるからな。

『神気魔法』は伝説上のもので、現実に存在しているかは未だ分からない。

さっきの魔力の話でも言ったが、

初級中級は内的魔力だけで使うものだ。

上級禁忌は、内的魔力＋外的魔力、という感じだ。

これは、中級と上級の差が大きすぎて、上級魔法を補助無しですると、

魔力の枯渇で普通に気絶するからだ」

「マスターはどうなんですか？」

「ああ。私は上級魔法なら補助無しで十発は撃てるよ。けど、さすがに禁忌魔法は駄目だよ。

ギルドにある図書館の最奥部の禁書庫に行かなきゃ、呪文さえ分か

らないし。

この事は後で説明するよ。これで良いかな？」

「魔法の階級は、初級、中級、上級、禁忌、神気がある、という事です。ね。」

そして、外的魔力を補助に使うのが上級以上。

更に、禁忌は存在してはいるけど使えない。

神気は伝説上のもの。これで良いですか？」

「そう。アイはもの分かりが良くて教えがいがあ。

次は、魔法の属性だ。

魔法には、属性というものがある。

属性とは、人に生まれた時からある先天的な才能で、魔法は生まれ持った属性でなければ使えない。

いや……少し語弊があつたな。

正確には、生まれ持った属性以外の魔法も使える事は使える。

だが、その分威力はとても低くなってしまう。

これは、自身の属性以外の魔法は、外的魔力も利用するからだ。

属性にはいくつか種類がある。

有名所から挙げていけば、『火』、『水』、『風』、『土』の四つがある。

そして、極稀に発現する属性で、『闇』、『光』がある。

属性発現は、血縁関係が関わると言われているが、この二つは、突然変異でできるもので、

今の所、闇属性、光属性から同じ属性の子孫ができた、というのを聞いた事がない。

そして、これにもまだ続きがある。

後二つ、これも伝説に出てくる属性で、『天』と『魔』がある。

どうだ？ 分かったか？ 無理して覚えなくてもいいぞ？」

「大丈夫です。

確か、属性は生まれた時から決まっっていて、

自分の属性以外の魔法は大部分を外的魔力に任せるから、必然的に威力が弱まる。

属性の種類に、まず基本の四属性の、『火』、『水』、『風』、『土』があり、

突然変異で発現する、稀な属性の、『闇』、『光』がある。

そして、伝説上の属性である、『天』と『魔』。

これで良いですね？」

「ああ。

言い忘れていたが、属性を複数持つ者も偶にいる。

そして、その様な奴らも、そうじゃなくても、属性複数を上手く掛

け合わせ、

新たな属性を作る事もできる。

『火』×『風』∥『炎』

『火』×『土』∥『鉄』
クロガネ

『水』×『風』∥『雷』

『水』×『土』∥『木』

等、色々ある。

勿論、この四つ以外も組み合わせはあるし、

世界には、三属性混合属性、なんて滅茶苦茶なもの作ってるところもあるらしい。

まあ、魔法の事で知っておく事はこれぐらいだ。次は、お前の属性と魔力値を測る」

「測る、ですか。

はい。分かりました」

自分が何属性か楽しみだ。これは純粹に。

第五話 魔法の階級と属性（後書き）

タイトル通りに説明したら、すごい短いですね。

でも、いつのなったら本編始まるんでしょう？

因みに言うと、学園編は遠いです。

第六話 魔力値測定、属性判定

「ここだ」

俺はマスターに連れられ、さっき居た部屋の更に奥にある倉庫に連れてこられている。

そこには……やっぱりこれはテンプレなのか、水晶が二つ置いてあった。

「まずはこっちの水晶に触れてみる。魔力値が出てくる。

自身の魔力値を知らなければ、どんな魔法を使え、そしてどれくらいの数魔法を使えるか

などの戦略も立てられない。だからまずはこれからだ」

「はい。分かりました」

俺はその水晶に近づき、左手で触れた。

右手の義手は話したが、自分の体ではないと魔力は無いので左手だ。

左手で水晶に触れた途端、水晶は部屋全体を覆う程の強烈な光を放った。

「はっ！？ 何ですかこれ！」

何がなんだか分からなく、マスターに聞いたが、マスターは慣れているといった感じで答える。

「これは魔力値を数値化する時にでる光だ。

因みに言っとくと、これは誰でも光るから心配するな」

「そうですか……」

すると光が止み、マスターが水晶を見るが、

「ん？ おかしいな……。故障か？」

俺も水晶を見てみると、そこには数字は表れていなかった。
改めて水晶全体を見るが、数字はどこにも無い。

「故障なんてあるんですか？」

「うーん……今までは無かったんだけどな。」

まあ、魔力値測定はまた後にして、次の属性判定やるぞ」

そう言つて、隣に置いてある水晶に行く。

俺も気持ち切り替えてやるか。

「いきます」

そう言つて、また左手で水晶に触れる。

今度は水晶は光らないが、水晶の中で煙が生まれ、それが色を持つていく。

「何だこれは？」

今度疑問を発したのはマスターだった。

水晶の中では、煙は色を持っている。

その色は純白と漆黒。二つの色が互いに拮抗しているような感じ

純白は、例えるならば、まるで天使の羽のように神々しい輝きを放っている。

……科学が全ての世界から来た俺が言うのも何だが。

漆黒は、まるで無に見える。

色であって色でない。そういう感覚。色というよりも、光の無い暗闇のようだ。

自分で言い得て妙だが。

「これって何属性なんですか？」

「……………」

「マスター？」

「……………分からない」

「はい？」

「こんな色など見たことが無い。

二属性持ちという事は分かるのだが、この色は初めて見た。大体、属性と色の関係は、

火 赤

水 青

風 緑

土 茶

光 黄

闇 灰

という、とても単純な色合いだ。

そして、その属性の色が濃ければ濃い程、はっきりしていればしている程、

その属性を使いやすい、という事があつたのだが……。

つまり、同じ属性でも、上下が分かれているんだ。

だが、こんな二色は初めて見た。それに、ここまではっきりしている色も」

「じゃあ俺の属性は一体？」

「……すまないが今はまったく分からない。

一応、この後魔法の実践を試みるが、その時に分かるだろう」

「そうですか。分かりました」

「よし。じゃあ行くぞ！」

俺とマスターは水晶の置いてある部屋を後にし、広い部屋に戻った。

（部屋）（三人称SIDE）

御神とギルドマスターが去った部屋。

ガッシャァン！

大きな甲高い音が部屋内に響いた。

尤も、部屋は防音性が高い様に作ってあるのか、部屋すぐ外を歩いている二人には聞こえない。

その音の正体は、水晶。

その内、故障と言われていた水晶は、まるでガラスのように、もう修復ができない程に粉々に、砕け散っていた。

後日、これが見つかって、ギルドマスターが怒り狂ったとか。
（ギルドマスター程の金持ちでも戦々恐々とする値段らしい）

SIDE END

俺とマスターは広い部屋に戻って来た。

「じゃあ、魔法の実践を行う。
簡単に説明しよう。」

魔法とは、まず『発動詠唱』から、『呪文名』と、二つを組み合わせる。

まあ、大体の魔法が、発動詠唱は同じだから、憶えるのは少ないけどな。

まずは、初級魔法の、一番簡単な呪文からだ。
俺の詠唱を聞いた後、それを実践して見ろ。
お前の属性は火じゃないが、外的魔力が十分満たしてある部屋だからな」

「そうなんですか」

「そうだ。よし、いくぞ！

一度しか言わないからよく聞いとけ！」

遂に魔法を使うのか。

楽しみだな。

属性が分からなかったのが心残りだけど……

第六話 魔力値測定、属性判定（後書き）

次回！ やつと魔法がでる！

発動詠唱は、他の小説の様に独創的にできないかもしれませんが：

：

第七話 初級魔法勝負と強化魔法（前書き）

少年練習中……

第七話 初級魔法勝負と強化魔法

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……………」

「どうした？ まだやれるはずだぞ？」

……俺の前には、服にさえ埃一つ付いていないマスターの姿。
俺は、服の一部に焦げ目が付いてるし、何より体力が持たない。

なぜこうなったか。

それは単純明快。魔法の実践訓練をしている。

俺は、マスターの詠唱を復読しただけで、全属性の初級魔法を使えた。

だが、それはどれも外的魔力の補助で行っているもので、

まあ、それでも十分に威力はあるらしい 自分の属性に合った魔法は無かった。

しかし、ここでマスターは、初級魔法なら全属性を使用できるので、一回、模擬戦を試してみないか、
という事になった。

それで、今俺は、自分で言うのも何だが、ボロボロなのである。

「いやいや。さすがにもう無理です。」

魔力残量はともかく、体力が持ちませんって」

「…………… 問答無用！ お前が倒れるまでやるぞ」

「はいー！？」

「火の精霊、我に答えよ！ 『アグニ・ランス』！」

もう何度くらったか分からない火でできた真っ赤な槍が三つ程飛んでくる。

「水の精霊、我に答えよ！ 『ウォーター・ジャベリン』！」

その火の槍の軌道に当てるように、こちらも三つの水でできた槍を飛ばす。

そして、マスターと俺の放った魔法が交わり、水を火が蒸発させ、火を水で消す。

「甘い！」

「何っ！？ ガハッ！」

魔法の方を見ていた俺の目の前に突然現れ、蹴りを鳩尾に入れてきた。

と、理解した時にはもう既に、俺は地面を転がっていた。

「ちよつと、今のなんですかマスター？」

この勝負って初級魔法以外は使っちゃ駄目なんじゃないですか？」

「それなら大丈夫だ。この部分強化魔法は初級の魔法に入る。一応だが。

それより！ さっきから魔法を撃った後の反応が遅いと言っているだろう！

って、大丈夫か？ 聞こえてるか？」

「ハアツ、ゼエツ、ハアツ……も、もう無理です………」

「はぁ……しょうがない。初級魔法実践訓練は俺の勝ち。お前は魔法の後の反応を早くするように。以上。」

で、次は一応初級魔法に分類される『身体強化魔法』を憶えようと思う」

「で、でも……こ、これじゃあ無理ですって………」

「大丈夫だ。」

水の精霊、彼の者を癒せ。『ヒーリング』。

……これでいいだろ。立てるだろ？」

「……！ はい。大丈夫そうです」

これは回復系魔法だろう。傷の痛みも無く、体力も戻っている。

「そうか。じゃあ身体強化魔法の基礎である、部分強化魔法を習得するぞ！

部分強化魔法は、その文字通り、体の一部だけを外的魔力で強化する魔法だ。

これを利用すれば、一瞬で相手の間合いに詰めれたり、刃を素手で相手する事もできる。

……まあ、そんな事は応用の粋で、俺やSランクしか出来ないがな」

「すごいんですね、強化魔法って。
それで、まずは何処の強化を覚えるんですか？」

「まずは、基本の部位として手と足だ。まずは手足の強化を憶えて
もらう、が……」

強化魔法には、やり方、というものが存在しない。
勿論始動詠唱も無い。

その始動方法は人それぞれで見出すしかない。
だから……」

マスターは喋りながら壁から出てる怪しい何かの紐を引っ張る。

すると……

俺は落ちた。

「えっ！？ ええええ！？ 嘘だろぉー！！！！！！」

落ちて落ちて、落ちまくった。
というか凄い深いぞこの穴。

すると地面が見える。

石の地面が。

「くそっ！ 能力発動！ 対象自身」

俺は風を操り、自分の自由落下している体をゆっくりにして、地面
に着地した。
そして上を見上げる。

「何するんですか！」

もう米粒程しか見えないマスターに大声で聞く。

「……自分で手と足の部分強化魔法を使う為のものだ。

高さは50mある。それを、手、または足を強化して這い上がって来い。

始動方法は自分で見出せ。穴の壁は、ほぼ凹凸が無いように作ってある。

そういう事で頑張れ」

そう言うと穴の底から見えない所に行ってしまった。

「……え……………」

一文字の呟きは穴に反響しながら消えていった……。

第七話 初級魔法勝負と強化魔法（後書き）

少年沈黙中……

第八話 駆け上がる（前書き）

サブタイ通り

第八話 駆け上がる

「……部分強化魔法、『両脚』」

大気中の外的魔力を操り、両脚に纏わせる。
そして一気に壁に向かって走り……

「おらアアアア！！！！」

壁を駆け上がる！

まるで重力に反しているかの様に壁を走る。

これができるのは両脚を強化し、瞬発力とスピードを
とてつもなく人外的にしてあるからだ。

しかし、

ズルッ

「あ、またこけた」

そして落ちる。

で、風を操り着地する。

「どうして駄目なんだ？ 両脚に纏わせる事はできた。なのにどうして……」

すると上からいきなり声が穴に響く。

「おい。強化は少しくらいはできたかー？」

「……駄目ですマスター。いくら脚に纏わせてもさすがに50mは無理ですよー」

「じゃあヒントだー」

『纏わせる』、これは間違いだ。じゃあ頑張れよ。因みにお前が穴に落ちてから一週間だ」

「ええっ！ もうそんなに！？」

マスターは言いたい事を言うと、すぐ穴から見えない所に行った。

というか、穴だから時間感覚狂うし、昼夜の区別もつかない。

まず、この穴があるのが隠し部屋だから窓も無いし。

飯はちゃんとあるのでいいんだが、まだ7食しか食ってないから二

日ちょいだと思ってた。

一日一食なのね、はい。

とりあえず、両脚はまた無理だったから、次は……

「部分強化魔法、『両腕』」

大気中の外的魔力を（ry

そして一気に壁へ走り、

バン！

そして片手で壁を思いつき叩く。

その勢いで反対側に飛んで行き、斜め下向きに壁を叩く。

それで斜め上に飛び、また反対側の壁を叩く。

そして更に……

と、こんな感じで頑張って上ろうとするのだが……

やっぱり途中で勢いがなくなっていき、

スカッ

「やばっ！ 届かない！」

で、また落ちて着地。

「はあゝ。やっぱり両腕上り方は駄目なのか？

やっぱり両脚戦法の方が良いか？」

だがマスターが言っていたのを思い返す。

「『纏わせる』、これは間違いだ、か……」

纏わせるが間違いというならば、外的魔力をどのようにして操れば良いのだろうか？

形を成して装着？みたいな感じか？

いや、マスターはあの時そんな事をしてなかった。なら何をしてた？

先程（といつても一週間前だが）行った実践訓練で最後にマスターは強化魔法をした。

その時の様子を思い出せ……。

あの時の戦闘を思い出す。

そして、マスターが最後に使っていたのは……

「ッ！　そういう事か！」

そうだ、思い出した。あの時、最後にマスターが使っていた強化魔法。

今思うと、脚の周りに魔力が感じられなかった。

つまり、脚の周りに纏わせてたんじゃない。

脚の内部。体の一部として外的魔力を操作していた！

「そうと分かったなら……」

部分強化魔法、『両脚』」

外的魔力を操り、そして、両脚と一体化すること！

って、あれ？　何故か普通にできたんですけど。

……多分、まあ憶測だけど、

俺は超能力の性質上、何かを操る事が多かった。

だからこれも……って感覚か？

「まあ、これならいけるかもな……」

そして壁に向かって走り、更に、上る！

「ウオオオオオオ！」

すげえ！ さっきも十分人外の域だったけど、これはヤバイ。
さっきの倍以上のスピードだよ。

俺はスピードをまったく衰えさせる事無く、穴の中から飛び出した。

「やったあああ！」

いやー、タネが分かれば以外と簡単だったな！

第八話 駆け上がる（後書き）

意外とあっさり終わった。

第九話 御代官の悪事

穴から駆け上がった其処にはマスターが居た。

「え？ もうできたのか？ そいつは凄いな。
で、どういう風にやったんだ？」

「いや、俺は前にマスターがやってたのを真似しただけです。
こう……両脚と外的魔力を一体化させるような感じで」

「……！ ほう。凄いな……」

「え？ 何がですか？」

俺としちゃ、普通なんだが、何かあったのか？

「いや実は、その一体化する強化魔法は、学生が辿り付けるものじや無いんだよ。

確かにそれを学ばせたかったのは事実だけど、予想では一ヶ月くらい掛かると予想してたから。

それをたった一週間、それに私の助言一つで理解し、実行に移すなんて、早々出来るものじゃない」

「……………それは……………ありがとうございます。」

って、それよりも教えて欲しい事が！」

「君の属性の事？」

「はい！」

「……はつきり言って私は驚いたよ。
君は、英雄にでも魔王にでもなれるんだよ？」

「は？」

よく聞こえなかった。英雄？　魔王？
何かの聞き間違いか？

「君の属性は伝説の『天』と『魔』って言ってるんだよ……」

「は？　それって本当ですか？」

「ああ、本当だ」

「天属性と魔属性って……伝説の属性……。
確か此の世を救う力と滅ぼす力でしたっけ？」

「ああ。それゆえに伝説になり、そして年月が経ち、人々の記憶から忘れ去られ、
そして存在すら伝説になった属性。

私も、古い、とても古い文書を偶然見つけなければアイの属性に気が付かなかっただろう。

これはとても凄い発見だ。
だがなアイ。これは同時にお前の危機でもある」

「俺の危機？」

「天属性と魔属性。

この両方を持つていれば必ず英雄視され、この国の侵略という欲を掻き立てる物にしかない。

それでもお前はその属性について知りたいか？」

「……………俺は、

俺は元の世界に戻り、この手で愛する人達を助けなければいけません。

だから、俺はこの世界で何でもするし、その為の覚悟はとっくにできてるつもりです」

「……………」

「……………」

「ハア……………分かったよ。

これで『はい』とか『いいえ』とか軽々しく口にしたら殺す所だったけど、

やっぱりアイはアイだな。

いいだろう！ 天、魔属性、両方を覚えるぞ！」

「はい！」

「と言っても、やはり天魔は此の世に今ある資料など皆無といって良いほどだ。

私が天魔について調べた所だつて、Sランクの中でも三人程しか入れないものだし、

其処にあった書物の中にも魔法については書かれていない」

「え……？　じゃ、じゃあ一体どうすれば……」

天魔の属性とは分かったが、その詠唱内容が分からなければ意味が無い。

そんなの宝の持ち腐れだ。

するとそんな俺の様子に気が付いたのかマスターが言う。

「大丈夫だ！　そんな時の為の『ロストエリア』だ！」

「ロストエリア？」

「そう、ロストエリア『遺跡』だ。

それは、現在では失われた古代の遺物や呪具とかが眠っている、まだ調査中の場所。

噂では、昔話にでてくる様な悪魔が眠ってるって噂もあるぐらいだ」

「成る程。そこを独自に調査して、古代の魔法、つまり天属性、魔属性についての

書物、あるいは遺物を取って来るんですね」

「ああ、そうだ。お前にはこれから、外的魔力による全属性中級魔法講座を予定している。

それぐらい憶えれば『ロストエリア遺跡』を一人で調査しても大丈夫だろう」

「！　はい、頑張らせてもらいます！」

で、やっぱり盗って良いんですね？」

「ああ、盗って、な。

フフフフフフフフ……」

「クククククククククク……マスターも悪ですね……良いんですか？」

「フフフ、良いんだよ。お前は俺の息子だしな。

それに、俺だってアイ程じゃあないし……」

「ククク……」

「フフフ……」

「ハァーハッハッハッハ……！！！！」

この笑いは、地上の、更に部屋外にまで聞こえていたとか。

第九話 御代官の悪事（後書き）

主人公とマスターの性格が一時的に壊れました。

バッ 土下座の音

御免なさい！ すみません！

第十話 出発！ 目的地は100？先！？（前書き）

遺跡で荒稼ぎフィーバーしていきます。

第十話 出発！ 目的地は100？先！？

「土の精霊、我に答えよ。そして大いなる力、ここに顕現せん！
『アラウンド・ストーン』！」

地面から直径1m程の岩石が幾つか飛んで行き、的に寸分の狂い無く当たる。

「はい。これで全属性中級魔法の会得完了だな」

「……こんな簡単に進められて良いんでしょうか？」

「まあ、元々君には魔力が沢山あるし、超能力って言うのと結構近いものがあるからね、魔法には」

「まあ、使えて困る事は無いんですけど……」

「なら良いだろ。それより、さっき話した事なんだが……」

「『遺跡』の事ですか？ 何処か丁度良さそうな所見つかったんですか？」

「ああ、結構近くにあった。

まだギルドでも、王室でも、調査隊が結成されてなく、それでいて全属性初中級魔法があればいいけそうな所」

「……いつ行きますか？」

「君一人だけど、明日には行ってもらおう」

「明日、ですか。結構急ですね……」

「まあ、ノロノロしてたら先に調査されるかもしれないからね。で、場所なんだけど……この街から100km程東に行った所なんだよ」

「100? って……遠いじゃないですか!」

「いや、これでも近いほうだよ。

だって考えてみなよ? 街の近くに『遺跡』があつたら、すぐさま調査されてるよ。

だから、これでも近いほう」

「そうですね……なら良いんですけど」

「じゃあ、準備はこつちがしとくから。

アイはゆつくり休みなよ。いくら魔力があるからって、こんなに続けて訓練してたら気が持たないから。

じゃ、お休み」

「お休み?」

「外はもう夜なの。だから、お休み」

「……お、お休み……」

そのままマスターは部屋から出て行ったので、俺もその後部屋を出、言われていた部屋に行った。

部屋の中は、机と椅子のセットが一つに、木製ベッドが一つという、

簡易な部屋だった。

「はあ……疲れた………」

制服から私服（マスターがいつの間にか買ってくれた）に着替え、そのままベッドにダイブし、睡魔に身を任せた……………。

ここは、ビルの中？

泣き声が聞こえる、そちらの方を見る。

体中を切り裂かれ、血を大量に流している少女。

そして、体から骨を突き出し倒れている少年。

更に、そこから少し離れた所にいる……真っ黒な、物。

その傍で、涙を枯らせ、絶望の表情の二人の……………

バツ！！

布団を蹴って、勢い良く起き上がる。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……夢か………」

あれは夢のはずだが……妙にリアリティがあった。

「……紫………琴雪……皆、絶対俺は、戻ってみせる！！！！！」

部屋の椅子に掛けられている制服を取り、私服から着替える。
そして部屋から出て、ダイニングに行く。

そこには、既にマスターが居た。

「よう。やっと起きたか。朝食は其処に有る。さつさと食べるよ？
今日は『遺跡』に行くんだから」

「はい」

木製の椅子に座り、
目の前にある黒パンを食べ、コンソメ（なのかどうかは分からない
が）スープを飲む。

さつさと食ったあと、マスターの所に行つて、今回の詳細を聞く。

「今日、早速が行く『遺跡』は、
ここから東100？地点にある『アスローム・ロストエリアアスローム遺跡』だ。

そこは、だいたいが竜種の魔物の住処になっている場所だ。

竜種の中にはとても強く、この前話した様な、最上位の魔物
である『リントヴルム』

なんて言う奴も居るが、ここの遺跡には居ない……………と思うから、安心して逝ってこい！」

「安心できますよね、その情報……………」

「準備としては……………」

まあ、お前の超能力があれば、別に何も無くても良いと思うんだが、何か重要な書物類を見つけたらこの道具袋の中にある箱に入れば良い。

別に遺跡とかの壁画なんてのも何かあったら削り取って来ていいから。

……………質問は？」

「ありません。ここまでの準備、ありがとうございます。じゃあ、行ってきますよ。」

あ、魔物って、やっぱりとくとくと換金できますか？」

「ああ。荒稼ぎして来い！」

「はい！ 行ってきます！」

第十話 出発！ 目的地は100？先！？（後書き）

荒稼ぎゝ万歳。

しつこいですね、はい。

だって俺らは！（俺ら？）

『金のために飛び込み、金のために泳ぎ、

金のために潜り、金のために沈めるぞ！！』 byめだかボックス

すみません……自重します。

第十一話 疾走爆走

「さてと……行くか………」

とりあえず街から出て、東に歩いていく。

人気の無い所を見つけたら、慎重に、見つからない様に飛ぶつもりだが。

「けどこれって、目立ちすぎだろ………」

俺の服装は、制服ではない。

マスター曰く、

「その服はとても精密に、そして丁寧に織り込まれていて、この世界ではありえない物」

と言っていた。

つまり、そっちを着てた方がとても目立つのだが、

「これでもあんまり変わらないよな………」

まだ街からあまり離れていなく、近郊という事で、

魔物はまったく居なく、人の往来がまあまああるのだが、さつきから道行く人々が俺を、いや、俺の装備を見ていく。

今の服装一（装備）は、出かける前にいきなりマスターから渡された物で、

これを着て、この武器で戦えば、超能力なんて使わなくても大丈夫

だと言っていた。

確かに、超能力乱用で、国に不信感を持たれたり、無駄に警戒されるのも回避したいのだが。

「この装備は無いだろ」

さつきから俺の装備を気に掛けている人が多いだろう。

まあ、他の小説に比べたら、矮小かもしれんが……ん？ 何か言っ
たか、俺？

まあ、気を取り直して、
今の俺の装備。

全体的に、FF7ACのク ウドの服装を灰色っぽくしたもの。（
狼原料だから？）

俺には似合わないが……。あれはクラ ドにしか似合わないんだ
よ！

あ、因みに、本物と左右対称になってる。つまり、俺の場合右手が
全体スッポリ覆われてるって事。

これは、やっぱりこっちで機械なんて見せたら、ちょっと魔女狩り
再臨みたいな事になりそうだから。

まあ、この服も、材料が最高で、

しかも、ギルドの全技術を駆使して作ったから、ここまでの物が出
来たらしい。

なんでそこまで……。。

で、今の俺の武器。

これも、無理だ。

なんでクラウドの服装にセフィアスの所有物っぽい太刀？

ちよっと組み合わせが！

やっぱここは大剣系なのかと思ったけど、太刀でした！ しかも、これも掘り出し物！

やっぱりこのでかい太刀。『遺跡』で見つかった古文書を参考に作ったらしい。

でも、作ったのが大きすぎて、しかも今までに無い武器だから、誰も扱える人が居なかったとか。

それが俺に回って来た、という訳。

……改めて見ると、やっぱり目立つ。

格好良いのは良かったんだけど、やっぱり目立つ。

確かにこっちで太刀を使えるのは嬉しいけど、やっぱり目立つ。

……
二言目には目立ってか？

まあ、もうそれも割り切る事にした。

いつまで悩んでも関係無いし。時間の無駄だし。

よし、どんどん歩きましょうー「おいお前！」「……？」

いきなり後ろから声がしたんで振り向くと、
其処には一人の、

いかにも盗賊業やってます！と言っている服装の、俺と同じくらいの歳っぽいボーイッシュな感じの少女が居た。

「何か用ですか、盗賊さん？」

「なっ！　なんで私の事が盗賊って分かったんだよ！」

「いやそれは、誰がどうみても貴女の服装が盗賊！って感じなので」

「……よ、良く分かったな！　今のはお前を試したんだ！」

胸を張って冷や汗かいて答える盗賊少女。

「それで、もう一度聞きますが何の用ですか？」

「あ！　それだった！」

……ゴホン、

お前の有り金、全部置いていけー！」

「……………」（俺）

「……………」（少女？）

「……………」（俺）

「……………」（少女？）

「……………」ハア……………」

「な！　何溜め息ついてんだよ！」

何か変かよ!」

「武器も無し、しかも相手に既にばれている思惑」

「あ……武器はー、えっと………」

「……………」

「す、すみませんでしたあー!」

「ハア……まあ良いよ。」

けどさ、もう少し観察眼を磨いた方が良いんじゃない?」

「?」

「俺、無一文だよ?」

「うつそー……!……!」

嘘ではない。何を隠そう俺は金を持っていない。

それは普通なら道具、その他諸々買うのに金がいるが、お前なら大丈夫だろ、というマスターの短絡的判断により、無一文なのだ。

因みに、目の前では少女がorzしている。

「まったく、もうそーいうのは止めといてくれよ……」

「う、うるせー! 私は絶対お前から何か盗ってやる!」

「はいはい。じゃ!」

そう言い残し、俺のできる限りのスピードで、走る！
絶対に逃げきってやる! ……なんで逃げてんだ?

思いつきり、100m12秒フラットなペースで走る。

ちよつと後ろを振り向くと、

「おらあああああ!」

女子特有の高い声を響かせながら、鬼神の如くこちらに向かって……

「逃げる!」

「あ! 待て——!」

だからなんで逃げてんだ俺?

第十一話 疾走爆走（後書き）

めだかボックスって面白いと思いませんか？

（何をいきなり言ってるんだ作者は^{コイツ}）

第十二話 兄妹誕生！

「ハア……もう追ってこないだろ……………」

しばらくあの盗賊少女からの逃避行？を続けてたら、いつの間にか居なくなっていた。

多分体力が追いつかなかったのだろう。

「つて！ そんな訳あるか！」

「うおわ！」

もう人氣がまったく無くなった道で、いきなり草陰からアイツがでてきた。

「やっと追いついたぞ！」

「で、本当に着いてくるの止めてくれないか？
俺がこれから行くところはさ、ちょっと危険？地帯だからさ……………」

「ふん！ だから何だってんだ！ 私はお前から何か盗むって決めたんだよ！

そんなに離れて欲しかったら何か寄越せ！」

「……言い分が理不尽すぎて逆に呆れるな……………」

「なんだと！」

「まあまあ、落ち着いて。

えーと、今此処は……は！？　もうこんな所まで来てんのかよ！」

地図で大体の場所を確認すると、もう既に、道のりの半分弱いつていた。

って事は、俺とコイツの追いかけてこはフルマラソンだったのかよ！

軽くショックを受けてる俺の様子に気付き、少し思案顔で近づく少女。

「おい……お前、何か顔色わりーぞ。大丈夫か？」

「ああ。大丈夫。

ただの追いかけてこ？がフルマラソンだった事が軽くショックだっただけだから……」

「ふるまらそん？」

「ああ、こつちにはマラソンって無いのな。
まあ良いや。

……で、本当にこつから先行く所は、お前じゃあすぐ死んでしまう様な場所だ。

さつさと諦めて、さつさと家帰れ………」

「ねーよ………」

「ん？」

「家なんかねーよ！

私はなあ、一家全員皆殺しにされて、帰る所なんてねーんだよ！」

「……！」

「ちくしょお……バカにしゃがって！」

俺は絶対生き延びて、あいつらに復讐してやんだよ！」

「……………」

「だから絶対、今は生き延びてやる！」

コイツは……似てる。

記憶にある俺と紫の家族。

親の顔。仲良く遊びに行った日。

そして殺された日。

コイツは、俺と似てる。

違うのは、その後どうなったかという事。

俺は記憶を消され、のんびりと暮らし、

片やコイツは、少しでも多く生き延びる為に動く。

「そっか、そうだったのか……」

「んだよ！ 変な同情なんてしたらぶっころ……！！」

気付けば俺は、俺より少し低いぐらいの彼女を抱きしめ、囁いた。

「大丈夫。大丈夫。俺がいるから。この世界で、お前は一人じゃない。」

だから、もう安心しろ。もう強がらなくていい……」

「！

でも、私は、私の生き様を変えるつもりはねえ！」

「いいんだよ！

お前が考え、お前が決めたならそれでいい。

それが死に様じゃあないならなんでもいい！

だから………」

俺は彼女から離れる。

そして、言う。

「俺の家族に……俺と一緒にいこうぜ！」

「！

だ、誰になるかよ！ そんな……いきなり……」。

で、でも、その、ありがとう………」

「フフ、良いんだよ。

よし、これから俺がお前の兄だ！ 何でも言え！」

「はあ！？ 普通私が年上だろ！？」

「いや、俺が年上だと思う」

「んだよ！ じゃあお前何歳だよ！」

「15」

「！ 私は14……」

「じゃあお前が妹な。よろしく妹！」

「たった数ヶ月の違いの癖に——！」

「まあいいだろ。さ、俺の妹でいいなら行こうか。
これから行くところは危険だけど、俺なら大丈夫だから。」

「……で、お前は何か武器持っていないのか？」

「……………」

「お前、まさか……………」

「よし！ 行くぞ兄！」

「誤魔化すな。」

「……ハア………… お前よく盗賊とか復讐とか考えたな……………」

第十二話 兄妹誕生！（後書き）

私が書くと、

頭の中のシーンはいいのに、

文力（ぶんりき？）ゼロな、とても軽いものになる！
俺はだめだぁー！

第十三話 和む

まあ、いくら何でもこれから行くのは『遺跡』だし。

難易度（難）くらいなダンジョンだから、

結局、道程にあった小さめの町で、軽い短剣と、ナイフ複数を買ってやった。

100?も歩くのだから町が無い方がおかしいのだが。

それと、金? そんなの途中で変な魔物いくらか狩って、即換金ですよ。

本人によれば、

「私は……えーと……短剣とか……ナイフぐらいなら使えるんだ!」

らしい。（真偽は定かではない……）

しばらく歩く。

歩く、歩く、歩き続ける。

………

やっぱり歩く。

人気が無い所から、町に近づき人気がまあ増えて、また人気が減ってきた。

けどまだ歩く。

妹がいるので超能力は使えない。

だから歩く。

「……………」

「……………」

「だぁー！　いつになったら着くんだよ！

なぁ、いつになったら着くんだよ！

なぁ、いつになったら……

「うるさい！」

！　なんだよ……………あとどれぐらいか教えてくれても良いじゃねーか
よ……………」

「あと30？」

「はぁ！？　どんだけ歩くんだよ！

兄の目的地って何処だよ！？」

「…………『遺跡』……………」

もううるさくなってきたので、素直に行き先を教えてやる事にして、
ボソッと呟いた。
だが……

「ええええええええええ！」

「女が大声出すな。はしたないぞ」

「いやいや、ここからの『遺跡』っていったら、

あの『スラローム遺跡』だろ！？」

冗談じゃねえ！ 何で私がそんな危険地帯にホイホイ行かなきゃなんねーんだ！」

「……そっか、どうしても行きたくない？」

「あつたりまえだろ！」

「……じゃあいいよ。」

俺だけでさっさと行って、帰ってくるから。
だから妹はここで待ってて」

「え……………」

「じゃー！」

そう言つて、後ろに視線を感じながら先へさっさと進む。

妹（名前は非公開） SIDE

「あ……………」

本当に行っちゃったよ。

あゝ！ 何言つてんだよこの私のおおばか！

鳥の鳴き声だかなんだかしてすっげえ怖いんですけど！

「え、嘘でしょ？

アイにいゝ……………」

『……………』

「……………」

まずい。まずいよ！ 本当に置いてかれちゃったよ！

どっしょどっしょどっしょ！

いや、今からでも遅くないはず！

「待ってゝ、兄ゝ！」

そのまま兄の行ったと思う道を追いかけて、走った。

妹SIDE END

「待ってゝ」

ん？ 後ろから妹の声が聞こえる。

「どうした？」

「そ、その！」

やっぱり兄には私が居ないと、その、駄目だと思ったんだよ！
だから、私も行くよ！」

「はい？」

「だ・か・ら、私も一緒に行つてあげるって言ってんだよ、『遺跡』に！」

顔を真っ赤にして強がる妹。

はあ……しょうがない。

「分かったよ。頼りにしてるよ？」

「あ……ああ！ 任されたぜ！」

こりゃあ『遺跡』でも心労が増したな……………。

第十三話 和む（後書き）

心に立つ三本柱は友情・努力・勝利じゃない。
無慈悲・理不尽・超最強だ！

第十四話 潜入捜査（前書き）

今回も特に何も無い回です。

第十四話 潜入捜査

「はあー、ここが『遺跡』かー」

前は怖がつてた癖に、『遺跡』の前で感嘆の声を上げている。

「ほら、はやくいくぞ」

「あ、ああ、分かったよ……」

二人で、『遺跡』の土地の中に入っている。周りは廃墟で、俺の知ってるのと違うのは、建物が全て石造りの簡単なものの所だ。

本当に、遺跡！っていう雰囲気だ。

歩いていく中で、色々な建物に入って行き、そこにある石碑やら文書やらを探すが、まったく見つからない。

「なあ、本当にここに兄の捜してるものあるのか？」

「ああ、ここにあるはずなんだが……」

しかし変だ。

建物は、元々崩れているものばかりだが、誰かが通った形跡がいくつかあった。

そして、何処にも見つからない古代品。

更に、極め付けは、

「魔物がいない……」

「そう！ 私も思ってたんだけどさー、ここ一応じゃなくても『遺跡』でしょ？」

強い中位上位の魔物ぐらい居るはずんだけど、さつきから、一匹も居ないよ？」

そう。先ほど遺跡に入ってから、まったく魔物と遭遇していない。だが、戦闘の後も無ければ、魔物の死体も無い。

これはつまり、魔物が自分から移動？
それか人為的に移動させられたのか？

だとしたらその首謀者は何を企んでいる？

「なあ、魔物を統率できる奴か魔法って無いのか？」

「はあ？ そんなの居るわけないじゃん！

魔物って知恵も何も無いって事は兄だって知ってるでしょ？」

「そうなんだけどなあ……………」

「あつ！ そんな事より、ほら、今までで一番大きい建物があるよ！」

前を見ると、今まで歩いて見てきた遺跡っていう雰囲気建物が、まるで掘っ立て小屋に見える程の建物、いや、世界遺産登録済みの中の文化遺産の神殿ですか？

と思いたくなるようなものが立っていた。
いままでのものより数十倍は広い。

「「怪しい……………」」

妹と考えがハモった。

まあそれはいいとして、明らかに、古代品はこちら！
ってバーゲンセールしてる様な感じた。

「まるで古代品のバーゲンセールだな……………」（byベータ）

「……………搜してみる？」

「ああ……………よし、行くぞ！」

何も罠っぽいのが無いのを確認して、でかい扉をゆっくりと開く。

扉を開けた先は、一本道の通路で、奥まで光が届かず、真っ暗になっている。

「ねえアイ兄……………」

「なんだ？」

「こういう展開って、だいたい最終場面だよな？」

「……………同感……………」

果たして、アイ達は大魔王（偽）を倒せるのか！？

つてか？

第十四話 潜入捜査（後書き）

次回、戦闘あるかもね！？

第十五話 逃走済！

「いつまで続くんだよー！」

「はあ、本当に何処までなんだろう？」

今、俺達は遺跡の神殿？内部に潜入している。

最初の扉から入ってずっと一本道だったのだが、それがまだ続いている。

もうかれこれ二十分ぐらい歩いた気がする。

「まったくさー！ 兄の捜してるものって何なの！？」

「……だからそれは言えな「お兄ちゃん……お願い教えて……」」

グヴァハアッ！

あいのせいしんに 1652 のだめーじ！

あい は はなぢ じょうたい になった！

「す、すまん！ 教えるから！

あ！ 泣かないでえー！」

男（兄）には、嘘無きと分かっている、女（妹）を泣かせちゃいけないんだよ！

「かくかくしかじかで、ごによごによなわけ」

「……もう何があってもおどろかねーよ……。
ということは、この奥にその天魔属性の魔法について記された書物があるかもしれねーのか……」

「そう。他の所には不自然なまでに無かったから、考えられる状況は三つ。

一つ目は、盗賊やら何やらが来て、根こそぎかっぱらって行った。

二つ目は、魔物でも操作できる程の人為的な奴が、全ての書物、魔物を何処かに集めた。

そして三つ目は……」

ゴクッ……

「み、三つ目は？」

「三つ目は、最初っからここに書物なんてない！」

「それじゃ意味ねーじゃんかー！ー！」

グオオオオオオオ！ー！！

「……………」

「……………」

「……………いや、妹よ。お前っていつ魔物と声を合わせるようになったんだよ」

「って！ おい！ そんな後ずさりしながらよそよそしくなるな！
つーか魔物なんて知らないぞ私……は………」

「ん？ どうした？」

妹は俺の後ろを指差し、アワアワと口を開いて、焦っている。これ
も良い顔だな。

「あ、後ろから、ってえ！ もう間に合わないよお！ 逃げるが勝
ちだー！」

あれ？ 妹よ、君は何処に行くんだい？

俺達が進んできた方向そのまま奥に走っていく妹。
そんなに急ぐ事あったか？

ふとさっきの発言が気になって、今まで来た道を振り返るとそこに
は……

魔物がウジャウジャと、めんどくさい数がいた。数え切れない。つ
まり無数。

魔物が大群となって、まるで獲物を食い尽かさんともあろう勢いで
走ってくる。

小さいものは、鼠型下位魔物から、大きいものは竜系統の上位魔物
まで多種多様だ。

ん？ 待て待て、今俺はなんと言った？

「竜系統の……上位魔物おー！？」

もう数十メートル前まで迫った魔物から視界と体の向きを反転させ、ダッシュする。

「ちくしょー！ 何なんだ！」

魔物と一定間隔があいている状態をどうにか持ち応えながら、妹に追いつく。

「やあ妹。大丈夫？ 疲れてるみたいだけど？」

「ハア、ハア、はっ、分かてるならどうにかしろー！」

「……いや、だってさ、上位の魔物もいるんだよ？ しかも竜系統」

「とにかくどうにかしてー！」

「……………（作戦思考中）」

ピンポン

「これ、だあー！」

叫びながら走っている体をいきなり急回転させる。

そして、服の右手のスリーブ部分についているボタンを外す。

バサアッと右手がその機械でできているメタリックシルバーの光沢を輝かせる。

そう。科学の力でできたこの世界には無い反則。イレギュラー

機関銃の激しい銃声の中で、微かに聞こえる薬莢の金属音。

そして、その弾幕の中で動くものが見えなくなり、音も静かになってきた頃に、機関銃を止めた。

「ふう……………」

「やっぱこれ疲れるな……………」

まあ反動も来るっちゃー来るものだし？

「な、ななな何？ 今の！」

俺の前には、小さかった魔物は粉となり、大きい魔物はただの肉片と化していた。

結構グロテスクな画だ。

「お前、これ見ても大丈夫なの？」

「はっ！？ あ……………うきゆうー……………」

バタリとその場で気絶してしまう妹。

……………そんなに闘えんの！？

まったく、つくづくおいしー奴である。

第十五話 逃走済！（後書き）

この頃あとがきで書く事ない！

あ、皆さん安心してください！
妹の名前は決まってるんで！

なんとなく名台詞。

『地球は俺にとって小さすぎる。

太陽でようやく偉大なる俺に匹敵しよう……………』 by 王

登場人物紹介（主人公、妹、マスター）（前書き）

外的魔力適正属性とは、外的魔力を使って行使する弱体化した魔法のなかでも、

その人がとりわけ強く行使することができる属性。

基本的に、外的魔力では光や闇は無理。

登場人物紹介（主人公、妹、マスター）

アイ・M・ウィルドレース

本名は、異世界から何故か来てしまった御神哀。

とてつもない女顔で、体も、男で言うところの華奢、線細。女で言うところのスレンダーな感じだ。

でも女に間違われると、男に対しては制裁を下し、女に対しては怒鳴るだけ。（だけ？）

アイが名前。Mはミカミ。この世界ではミドルネームとして名乗る。ウィルドレースは、アイがいつつもマスターと呼んでいる人物の苗字である。

内的魔力属性・天属性、魔属性

外的魔力適正属性・火属性、水属性、風属性、土属性、光属性、闇属性

魔法は、内的魔力である天、魔属性は、未だ魔法の名称すら不明。外的魔力適正属性では、全属性を中級魔法まで全て余す所無く使える。

しかし、一応は外的魔力によるものなので、混合はできない。

その他・元の世界で培った最強の超能力―（作者が思った）である、マテリアルコントロール『祖体制御』がある。

詳細は『In The Material?』の全登場人物能力表に掲載。

右腕が義手であり、神経と機械神経が接続されているので、某錬金術師のように自由に動かせる。

見た目はターミネーター＋外骨格。

機能として、『抹殺のラスト リット』もどき、機関銃、小型ミサイル（一発きり）などがある。

「はっきり言って超能力＋魔法って最強ですよねー？」by 作者

アリア・M・ノーヴィス

アイから身包みはごうとしたけど失敗。

つい自分の身の上を話し、アイも自分と同じような境遇である事をしる。

それから色々あり、アイの提案により、アイの家族（妹）としている。

本名は、アリア・ノーヴィスだったが、御神の妹なので、Mを貰った。

はっきりいって名前と性格がまったく合わないキャラ。

性格は、男勝りで生意気な喋り方だが、体の発育は中三とは思えない程引き締まって、

作者から言わせれば、美n……ゴホンゴホン……の粋である。

けどやっぱり女の子なので、グロいのは苦手で、見たら気絶する。

本人曰く、

短剣やナイフぐらいの武器だったら使えるらしいが、

戦ったところをアイが見た事があるのは皆無。

内的魔力属性・水属性、風属性

外的魔力適正属性・火属性

内的魔力の魔法は、意外と優秀で、風ならば、ギリギリ発風の上級魔法を撃てるらしい。

しかし、撃つたら体力と魔力の消費が激しく、一日は撃てないそう
だ。

外的魔力適正である火属性は、多少威力は下がるが、中級の最初の方なら使える。

魔法では全体的に、足腰を強化する魔法が得意。
その素早さで敵を翻弄する。

ギルドマスター

苗字はウィルドレース。

見た目や喋りはともかく、雰囲気総隊長さん明るいヴァージョンな感じで、

アイに多大な安心感と親近感を感じさせる。

今のところは、名前は誰も知らない。

世間では、ギルドマスターとウィルドレースとしか呼ばれていない。
名前はアイでも知らされていない。

アイは、マスターと呼ぶ。

これには意味がいくつかあり、

総隊長と同じようなニュアンスの、ギルドマスターから、マスターをとっているのと、

自分を更に鍛えてくれる、尊敬するものとして、マスターと呼んでいる。

後は、名前が分からないし、苗字も長いから。

内的魔力属性・火属性、土属性、光属性

外的魔力適正属性・水属性、風属性、闇属性

勿論ギルドマスターなので、内的魔力の魔法は全て上級まで使える。外的魔力でも、まったく威力を落とさずに中級魔法レベルを撃てる。

光属性を持ちながら、なぜか突然変異でしか生まれることの無い闇属性を外的魔力で行使できる。

このことはアイもまだ知らない。

こいつも意外と最強だった。って、そしたら『最』じゃねーじゃん。

登場人物紹介（主人公、妹、マスター）（後書き）

どうでしたか？

何か誤字、矛盾、疑問などあったら教えてください。

第十六話 ディアボロス（前書き）

いきなりシリ阿斯パート突入。

第十六話 ディアボロス

俺は今、妹をお姫様だっこして、また更に奥へと向かっている。

「う……此処は……………」

「おう。起きたか？」

「って！ 何でアイ兄がこんなつ……………っーか離してっ！」

「あ、ああ……………（俺の事やっぱ嫌いなのかな……………）」

「まったく。いくら妹とはいえ寝てる間にお姫様抱っこはねーだろ！

（あゝ、恥ずかしい！

相手は兄だぞ。義理でも兄だぞ！ まったく、すげー恥ずかしいー
！」

「……………そーだな……………（ハア……………俺って……………）」

何かといきなり齟齬が生じてる兄妹だった。

「って、それよりまだなのかこの道は。

いつまで続くんだろーな？」

「いや、少しだけ風が複雑に動いてる。

多分出口があると思うよ？ それも風が行き来できるほどの」

「ハア！？ 何で風の動きなんて分かるんだよ兄は！」

「いや、それは……訓練の賜物？」

「……嘘っぱいけど、まあいいよ。それじゃあ急ごう！」

そう言って走り出す妹。

実を言くと、妹に話したのは、マスターに拾われた事と、属性のこ
としか言っていない。

だから、異世界の事、超能力の事、右手の事も言っていない。

さっきは危なかった。風の動きは、超能力で一番最初に基本として
使い始めたものなので、
つい自然にやってしまう。

右手の事も、気絶してうまく忘れてくれたようだ。

まあ……いつかは話すさ。妹だし、嘘は吐き続けられない。

「おい！ 早くいこーぜー！」

「あ！ 待てよ！」

……紫、俺は異世界でこんなに幸せで良いのか？
俺は、お前の元に帰らなきゃいけないのに……。

って、似合わずシリアスな気分になった。
この議題はまた後。

今は、まずは妹の幸せ優先。俺も、帰るためには強くならないとな。

「あ！ おい兄！ あれ見ろよ！ 出口だぜ！」

「あ、ああ！ 行くか！」

考え事をしながら歩いていたら、いつの間にか凄く進んでいたらしい。

正面50m程で通路が途切れているのが分かる。

俺達はその所に走っていく。

そしてその出口から入った部屋で、

俺達は『異常』に会った。

俺達は一瞬で体が動かなくなった。

妹は、体をガクガクと震わせながら、青ざめた顔でソレを見る。

その『異常』は、黒くて、黒くて、黒かった。

体全体が光を取り込むかのように闇が広がっていて、
手には爪らしきもの。

足もちゃんとあった。

勿論、頭もあり、目と思わしき場所は、赤く紅く光っていた。

それは、形だけなら人間だったのかもしれない。

しかし、やはりそれは『闇』だった。人ではない。

記憶の中で、この『異常』と同格の人間を見たことがある。

そう、ホムンクルス達だ。

その見た目からは創造できないような闇を撒き散らす狂気。

でも、それは、一応でも人だったから闘えたのかもしれない。

だが、目の前にいるモノは、人ではない。

その異常は、闇の中で、口を開いた気がした。

『これも、運命か！』

ここに跳躍者と天使の末裔が同時に来るとは、なんと幸運か！』

低い、少しノイズが掛かった声が部屋に響く。

跳躍者？ 天使の末裔？

なんのことだ？

俺は脚の震えを気合で直し、『異常』に聞く。

「お前は……なんだ？」

『そうか。 跳躍者には名乗っておこう。』

私はディアボロス。 悪魔だ。 ……天使の末裔にはいらなないな？』

隣でビクツと震える妹。 こいつと妹は、会った事がある？

「……その、ディアボロスがどうして此处に？」

『そんなもの、これから滅する者には関係あるまい』

「チイッ！」

俺は、悪魔の、『滅する』という言葉聞いて、恐怖した。

脳が警告する。

こいつには、絶対に殺される。戦ってはだめだ。

ホムンクルス達なんて目じゃない！

悪魔は、口調だけでは分からないかもしれないが、確かに悪魔が悪魔たる所以が感じられた。

だから、俺は逃げる。

俺は死ぬわけにはいかない。しかも、妹を死なせるわけにはいかない。

俺は妹を抱え、扉の外へ走った。

「絶対に、殺されてたまるかつ！」

第十六話 ディアボロス（後書き）

主人公は死に怯える。
それは昔の経験から。

第十七話 『跳躍者』対『王』（前書き）

主人公のキャラが違いますが、
これは必死になっただけなんであしからず。

第十七話 『跳躍者』対『王』

部屋の扉から抜け出ようとしたその時、
勢い良く外側から扉が閉まり、ガチャリと音を出した。

「！ 何だよこれっ！ ゲームじゃねーんだぞ！
畜生、こっちは命が掛かってんだぞ！」

「アイ兄……………」

『さあ、我、悪魔の王ディアボロスと殺しあおう！』
ガンッガンッガンッ

「くそつくそつくそつ！」

いくら叩いても、魔法を使おうとしても駄目だ。

『無駄だぞ跳躍者。その扉は魔法無効化の呪いが掛かっていて、私でも開けれん』

「うるせえ！ これならどうだ！

能力使用！ 対象は扉！
『破壊』！」

使いたくなかったが、超能力を使う。

しかし、扉は碎けない、融けない、開かない。

何かに弾かれた感触がした。

「なっ！ 超能力も魔法と断定されんのかよ！？
この扉何でできてんだよ！」

「アイ兄……ごめんね。私のせいでこんなことに「うるせえ！」！
？」

「妹……いや、アリアのせいじゃねえ！
これは俺の問題だ！ 俺が処置する！」

おいディアボロス！ お前が本当の王ならその器に免じて一対一の勝負と行こうじゃねえか！

俺の妹……知らないが、お前の言うところの天使の末裔には手を出すな！」

『ハッハッ！ この状況で面白い事を言う！ さすが跳躍者！

まあ、挑発と分かっていても私は王だからな。

一人を滅せればそれでいい。いいだろう！ 私も良識ぐらいは持ち合わせているぞ！』

「はっ！ どうかのRPGと違って器が大きいな王！」

俺は妹を扉の傍に座らせる。

そして、魔法をかける。

「光の精霊、我に答えよ。そして頑強なる盾、ここに顕現せん！
『シャイニング・ヘキサゴン』！」

六角形の形をとる六つの光の柱がアリアを中心に立ち、

そしてその柱から光の線が伸びて、複雑な六芒星を形作る。

「え！？ アイ兄！ 何これ、そっちに行けないよ！？」

「これは光の盾の中級魔法。

けど外的魔力で俺が操れる最高の量を入れたから、上級魔法にも耐えられるはずだろ。

そしてそれは外と中の接触を遮断する盾。外からは勿論中からも外にできない。

……待つてろよ。きっと助けてみせる！」

俺は振り返り、ディアボロスと目を合わせる。

何か吸い込まれるような恐怖の感覚が支配する。

「待たせたな、始めようか」

『ククク、それぐらい、待ったとも言わんよ。

それより本当に良いのか？

今なら天使の末裔を差し出せばお前を助けて「黙れ！」……お前には必要の無い問答だったな！

悪魔の王相手に恐怖は無いのか？』

ディアボロス

闇が嘲笑しながらこちらを見る。

「怖いよ？

お前の言うところの跳躍者だって、勿論普通の人間だしな。

だから俺は、アリアを死なせない為に、俺が死ぬ！」

『良い根性だな跳躍者！ その無駄な足掻きを見せてみる！

先攻は貴様にしてくれてやる！」

「言われなくともな！」

体全体に強化魔法として、外的魔力を染み込ませる。

そして更に超能力を使い、背中と足に不可視の風の翼を出し、体全体も風で覆う。

「超能力者兼魔法使いを舐めんなよ！」

火の精霊、我に答えよ。そしてその大いなる聖火、仇為す者を焼き払え！ 『ボルケーノ・ブレイド』！」

火の剣を出し、右手で持ち、左手は、風の不可視の剣を握る。

「いくぞオ！」

その瞬間、俺は音速に迫る速度で、相手に向かった。

第十七話 『跳躍者』対『王』（後書き）

ディアボロス。

普通の敵と違って良識あります。

作者は思った。

RPGとかにでてくる大体の敵って、悪意バリバリじゃね？
俺は敵も、味方と同じぐらいちゃんと書きたいんだ！

第十八話 魔の闇と天の光（前書き）

主人公キャラ崩壊。

敵と仲良くなるパターン。

この状況でなんでこうなるの！？

に、ご注意ください。

尚、一部意味不明な事をいくつか口走りますが、
深く考えず、「そーなのかー」って感じでお願ひします。

第十八話 魔の闇と天の光

「ウオオオオオ！」

右手の火剣で切り込み、それと同時に風剣で突く。

そして風剣を突いたままなぎ払い、そして火剣を戻す。

それを体感時間僅か0.4秒でやったはずのに、

少し体を動かすだけの必要最低限の動きでかわす闇。

だが、まだだ！

「ハアッ！」

無詠唱による水属性の中級魔法。

水が刃物同然に硬化し、闇に向かう。

『こんなものか跳躍者！』

しかし闇はまた最小減の動きでそれをかわす。

見ていてこっちがイラつく戦い。

しかし、その油断の隙に、闇の後ろに回って火剣と風剣を一気に突き出す！

そして両方を反対方向になぎ払い、そして更に連撃を加える。

と、その瞬間。

ガシッ！

「なっ！」

火と風でできている筈の剣が闇から出た手に掴まれ、

バキィっ！

砕けた。

『遅すぎるぞ跳躍者！

もつとだ！ もつと王を楽しませろ！』

「俺が遅い！？ 俺がslowly！？

そんな馬鹿な！」

『次はこちらの番だ！

現世に存在する根源に宿りし全ての闇よ。我、悪魔の王に従い、敵を討ち滅ぼせ。

『ブローケン・ワールド』！』

瞬間、世界が歪んだ。

そして闇が俺に覆い被さる。

闇が俺の中に入ってくる感触。

肉眼には、世界は黒くなったように見えた。

何もかも黒い、闇の中で一人いる感じ。一筋の光も、一縷の望みも無い世界。

「ははッ、何だよこれ。ディアボロス！ お前何をしだッ!?」
腹に感触。

見るとそこは、

「んだよ、これ……………」

俺のナカから、闇が突き出ていた。

闇は、先を尖らせて、槍のようにして、俺の体内から外に突き出ていた。

それが何本も何本も。

それを認識すると同時に襲い掛かる地獄同様の痛み。

「ああああああ、あああああ！ があああああ！」

『言つたろう？ 跳躍者。貴様ではこの悪魔の王ディアボロスに勝てる事はできん!』

「ガ…………ハ……………アアガ……………」

う、るせえ！ 俺は、妹を、アリアを、護らなくちゃならねーんだよ！

例え、お前と絶対的な差があろうとも！

オレは、諦めねえ！

現世に存在する根源に宿りし全ての光よ。我、世界の跳躍者に従い、敵を正し滅せよ！

光の幻想、『ファンタズム・ホーリー』！」

その瞬間、闇に表れる光。

その神々しい程眩しい、後光のような光は段々世界（闇）を侵食、破壊していく。

まるでガラスが割れるように、次々と闇が砕ける。

『貴様！ なぜその詠唱を知っている！？』

それはこの世界では失われたモノのはずだ！』

「……分かってねえよ闇！ 分かっちゃいねーなア！

俺は知ったんじゃない！ 識^しったんだ！

失われた天属性、魔属性の詠唱。

お前が悪魔の王と聞いてから、お前自身が魔属性の魔法を詠唱する事を待ってたんだよ！

後はそこからヒントを得るだけだ！

お前のミスは唯一つ！ 俺の『能力』の意味を知らなかった事だから教えてやるよ。

俺の能力は、『識り』、『解して』、『創る』事なんだよ！」

『フツ、跳躍者の定め、か。

いいだろう。その定めの中から、抜け出してみろ！ 跳躍者！』

「いちいち王に言われなくとも分かってたんだよ！

お前とは良い戦友になれそーだったのに！ お前の性格どーにかしろつつーの！」

『論外だな！

王は、王故に、この意思は何人たりとも曲げられん！」

「ああそーかよ！　ならいくぞ王！

跳躍者、御神哀！」

背中に風でできた不可視の翼、

火でできた燃える翼、

石でできた無骨な翼を付け、風を纏い、火剣を構える。

『愚民に言われずとも！

悪魔の王、ディアボロス！』

闇から八対十六枚の黒い翼を出し、

闇そのものを固めたかのような剣を両手に持つ。

「護るべき者の為！」『己が信念の為！』

その二人は、さながら、古典的な、勇者と魔王の決闘のようだった。

「『二人の戦を、始めよう！』」

第十八話 魔の闇と天の光（後書き）

なんかもう最終決戦みたいな空気ですが、
違いますのでご注意ください。

まだ年月たつてないし、学校にだっていつてないですよ！？
キーワードに学校つてあるのに！

何かどうしても戦闘パート書くとめちゃくちゃな文になる。

魔法名がありきたりのツマラナイものになる！
だめええ！ 見ないでええ！

第十九話 矛盾探索

「うゝおゝあゝあああああ!!!!!!!!!!」

身体能力強化を体全体、最大限に使用し、

脳にも強化を掛け、『並行思考』で、一瞬で次の一手の様々な手段を考える。

いや、考えるしかない。

一瞬でも、カンマ1秒でも気を抜けない危機感と重圧。

それほどまでに、『悪魔の王』という存在自体が規格外。

「ッ！」

咄嗟に一步下がる、と同時に俺の前髪を掠る黒い塊。

『今のを避けるか！ ならば！』

黒い塊が二本一気に上から落ちる。

それを理解した瞬間、反射によって火剣で受け止め、弾く。そして後方に下がり、大勢を整える。

パワーも伊達じゃない。

……こりゃちよつとヤバイかもな……………。

闇は物質では無いので、超能力で操る事もできない。

無詠唱で岩石の槍を複数創り、超能力で思いっきり投擲^{ふっとはず}する。しかし、相手は避けようとしなない。

「なっ!？」

『こんなもの、闇には効かん!』

岩石が闇に当たった!と思ったその時、それは通り抜けた。比喩ではない。幻覚でもない。

そう、今思えば相手は『闇』そのもので構成されたもの。

固体ある『物質』が、そもそも形すら無いはずの『闇』に効くはずが……………

そこで俺は、違和感を感じた。

形すら無い? しかし相手は形を作る。

物質が効かない? ならなぜアイツは其処に立つ? なぜ俺の剣戟を防ぐ?

考える。相手は魔属性魔法を放ち、そして俺は天属性魔法を撃った。そしてそれは、確実にアイツに当たった。

『並行思考』で、剣戟の手を休めず、尚且つ思考する。考える。

俺の魔法は効き、魔法剣を防ぎ、だが唯の石は当たらない。

そして、『闇』が当たる俺の体。

この共通項は?

『こんな時に考え事か跳躍者!

もうこれでお前は終わりだ! 今だけなら特別に拝ませてからトドメを刺してやるっ!』

いつの間にか俺より上にいる相手は、剣を二つとも捨て、両手いっぱい横に広げる。

いちいち魔力感知しなくても分かる！ この魔法はヤバイ！

早く『答え』を……………

『虚無に存在する矛盾の力よ。』

我、世界を纏めし四人の末裔が一人、ディアボロスに従い、他の者を消滅せしめる！

極死の糾弾、断光の闇『デストロイ・オブ・ザ・クライスト』！』

世界が、いや、今この場所が、俺の目の前が『闇』で支配され、そして、砕け、消滅していく。

何もかもが消えていくこの場所。その光景は、聖書にある審判の時にも見え、

しかしそれよりも禍々しい何か。

言葉では表せない、人というちっぽけな器では何も出来ない絶対的な力。

「…………俺は最後まで、諦めねーぞ！」

考える！ 今はそれだけしか出来ない。

魔法なんて終焉の前では意味が無い。

だから今は、考える！

「俺は！ 絶対に死なねえつつつてんだろがぁ！」

瞬間、闇が、魔が、悪が、光を拒絶する『全て』が、俺が今居る此処を覆った。

第十九話 矛盾探索（後書き）

計算も何も無く、ただただ伏線をはりまくる作者。

その伏線に気付く人は……居ますよね普通に……

次回、最終回では有りません。

第二十話 疑問追求

ディアボロスSIDE

『……もう終わったか。跳躍者よ。その強さ、我が認めよう』

これで一人目。

だが、今はまだ王の尊厳にかけて、天使の末裔には手を出せんが、まあいいだろう。

もう一度魔力反応をこの広大な部屋の隅々まで確認する。

今この部屋内にいるのは、我と天使の末裔のみ。

跳躍者は死んだのだろう。

『世界を纏める四人の末裔。悪魔の王というのも、跳躍者も、難儀な関係だ……』

そしてこの借物の闇を霧散させようとしたその時、背後でパキンと、何かが割れる音がした。

闇をまた収束、取り込み、後ろを振り向く。

そこには、防壁に使われた魔力の残滓と、その光の中で泣く天使の末裔。

「なんでお前は！ ディアボロス！ また私の家族を！」

『止めておけ。まだ『覚醒』も済ませていない天使の末裔など、王

の前では唯の塵程度。

折角、戦友の跳躍者のお陰で助かった命だ。

また我に取られるまで大切にされた方がいいぞ？」

「！ 殺す！ 絶対に殺してやる！」

『……残念だ。跳躍者との盟約だからな。生かしておこうと言うなら良いが、

王に危害を加えると言うならばそれなりにやらなければな』

「ちょっと待ってくれねーかな？

それにアリア！ お前だって女なんだからそんな乱暴発言禁止！」

「！？」

『な！ この声は！ 跳躍者！』

なぜだ！？ あいつはもう死んだはずでは……………。

声の主へ視線を向けると、そこには、死んだとばかり思っていた跳躍者がいた。

ディアボロスSIDE END

あゝあゝ、こちらミカミ小队。HQ、聞こえますか？。

……今俺は瓦礫の下敷きになってる。

まあ、右腕を上にして支えてるからいいけど。

瓦礫から這い出ると、すぐ正面で妹が凄じ剣幕でディアボロスに殺す！って言うてる。

そしてディアボロスが微妙に殺気を出し始めた。

これはヤバイな。約束も何もない。早く助けるしかない！

「ちょっと待ってくれねーかな？

それにアリア！ お前だって女なんだからそんな乱暴発言禁止！」

「！？」

『な！ この声は跳躍者！』

「おいディアボロス。俺との約束はどうした？

それとも今は俺が生きてる説明をするのが先か？」

「アイ兄……生きてて良かった………」

『……なぜあの魔法をくらって生きている？

お前は確かにあの時確かに魔法の着弾地点にいたはず………』

また戦闘態勢になって警戒するディアボロス。

「ああ。俺も考えたよ。

あの魔法は何もかも規格外。詠唱も一瞬で俺には真似できないと分かった。聞いた事もない。

だが、お前は矛盾を残しすぎたんだよ」

『！』

「一つ、お前の体は『闇』そのものを収束させたものに過ぎない。これに至った原因は、ただの石がお前の体に当たらなかったから。お前の体に当たらないということは、お前の『闇』は、闇そのものを物質化したものではなく、収束させたもの。」

そしてそれからまた矛盾が生まれる。

二つ目、お前は俺の攻撃を防ぐ。これはなぜか？

闇ならば俺の攻撃を防がず『透過』させ、俺をメツタ刺しにでもすればいい。

だけどお前は受け止めた。

更に、お前は闇で攻撃できる。

普通だったら、透過する体なんて、攻撃できないからな。だがお前は俺に攻撃を当てる。

それプラス、魔法も当たった。

そして前提条件として、絶対に俺がする事。

それは、『全身強化魔法』。

……いや、語弊があるな。

普通、強化魔法なんて使わないと、魔法戦では一瞬で死ぬ。

だから、お前みたいな奴と戦う場合、絶対に強化をする。

しかも俺ぐらいになると、体に染み込ませ、体の一部として扱う。

これらの前提条件と矛盾から導き出せる答え。

それは単純なものだった。

……本人なら分かるよな？」

『クッ……………』

「どういうこと？」

「…………つまり！ ディアボロス。お前の体は本物じゃない。そして、だからこそ、闇だからこそ！」

お前、魔……力……に……し……か……攻……撃……で……き……な……い……ん……だ……ろ……？」

第二十話 疑問追求（後書き）

矛盾してるのはお前の文だ！

と、もうひとりの僕が言います。

という電波がきた。

第二十一話 殺合終焉（前書き）

やっと終わるバトルパート。

第二十一話 殺合終焉

「お前、魔力にしか攻撃できないんだろ？」

「え？　どういことアイ兄？」

「つまりだ、コイツはただの闇を魔力で集束させた者に入ってるだけ。

だから、物理攻撃には当たらない。闇は物質じゃないから質量もないし。

だが、魔力の塊ならば、魔法には触れられるはずだ。自分で自分を触ってるようなもんだよ。

だから、いくら物理攻撃に分類されると言っても、俺の魔力でできた剣は受け止める。

だけど、岩石は物質で、魔力を纏っていないから、避けない。そういうことなんだよ。

だから俺は、アイツの偽の体から放たれた、魔力にしか当たらない攻撃

を避ける為に、ギリギリで、全身強化魔法で体の中にある外的魔力を外に押し出したんだよ」

『この戦でそこまで見破るとは。流石と言ったところか、跳躍者。貴様との約束は守ろう。正体が分かってしまっではこちらの負けは必至。

今回はこちらから退く。

貴様としてはそれで良いか？』

闇一色なのに、フツとディアボロスが笑った、ような気がした。
……気のせいだろ。悪魔の王が笑うとか。

「待てよ。最後に聞きたい事がある」

『何だ跳躍者？』

「……『悪魔の王』、『跳躍者』、『天使の末裔』。
そして、『世界を纏めし四人の末裔』。

これは何だ？　そしてお前とアリアの会話から微かに聞こえた『覚
醒』。

これじゃ、どつかの性質の悪い御伽噺だぞ？」

『御伽噺か……。ある意味ではそうかもしれないな。

いずれお前達二人は、真実を目にする事になるだろう。

そして、もし真実を知りたいなら、『救世主^{メシア}』。

これがヒントだ。

私から言えるのはそれだけだ。

いつかまた再戦^{いっそうあそび}を楽しみにしているぞ跳躍者！』

「は！？　ちよつと待てよ！」

しかし俺の声は届く前に、

闇から魔力は消え、集束していた闇は霧散、消失していった。

「なんだったんだ……………」

「アイ兄……………」

「アリア、お前、何か知ってるか？
それと『天使の末裔』は？」

「ごめん。何も知らないんだ。
それに、アイツを知ってるのは、か、家族を殺したのが、アイツだから。」

「ねえアイ兄！」

「何だ？」

「一緒に探そう！」

「それで、真実を知りたいんだ！」

「ああ！ 言われなくともそのつもりだよ。
じゃあ、今日は帰ろうか。養父を紹介するよ」

「ああ！」

「よし！ 行こうか！」

『天使の末裔』の『覚醒』。

『跳躍者』と『悪魔の王』の戦^{「いひあひ}。

そして『救世主^{メシア}』。

分からない事がありまくりだが、やるしかないか！

第二十一話 殺合終焉（後書き）

『ディアボロス悪魔の王』
『ジャンパー跳躍者』
『エンジェル天使の末裔』
『メシア救世主』

というのが読み方。

次回は家に帰ります。

実は、二次創作。色々な作品を、

書きたい衝動のまま書くが、なかなかシツクリこない。
試し書きしてるのは、

リリカルなのはA's

ゼロの使い魔

ネギま

めだかボックス

学園黙示録

と、色々よりどりみどりで、
だけど、なかなか難しい。

第二十二話 帰路、妹鷲

今、もうディアボロスが居なくなつて、効力が無くなつた魔法無効化の呪いが掛かつていた扉を開け、そして既に神殿？からでている。今は街に帰る事が優先だ。

「なあ」

「なに兄？」

「情報とかその他諸々、この世界ではどういふ所で手に入れるんだ？」

「この世界？　そういえば『天使の末裔』は私？だとして、『跳躍者』ってやつぱ兄だよな？」

「アイツにもそう呼ばれてたし。何かあるの？」

「あー、その、なんだ。まあそれはまた今度……」

違う世界からのトリップなんて言ったら、「いつか帰るのか？」とか聞かれそうです。

とにかく、もう少し段取りをしてからだな……………。

「お兄ちゃん、お願い教えて？」

涙目の上目遣いでこちらを見てくる妹。

やめろ！　そういう目で見な！

その泣き顔だろ！　そうなんだろ！　そう言ってくれ！

「…………駄目？」

少し悲しそうにしながら言う妹。
もうやめてってばあ！

「わ、分かッ……………」

分かった、と言いきったとき、妹の目が笑うのを見た。

「ってないっ！ もうその手には引つかかんねえ！」

「…………チッ。まあいや。でさ、さっきの質問だっけ？」

「あ、ああ。（切り替え早いな……………。つーか今『チッ』て！）」

「情報は、やっぱりフリーの情報屋でしょ。もしくはギルドの高ランク保持者になる。

高ランク保持者のみに許される図書館があるらしいんだよね。
それと、さっき兄がやってた、『遺跡』の調査によるもの。

…………とりあえず、一般的な情報は学校の禁書館でいいんじゃないの？」

「……………」

「おい。聞いてるかー？」

「ああ、お前って結構知識あんのな。すげえな」

「何かバカにしたような褒めた様な発言……」。

まあ、これぐらいならこの世界の常識だからな。
少なくともこの国にいれば普通に手に入る程度の情報だよ?」

「あ、そう。まあ、色々結構検討つけといたから、とりあえず今はマスターの所に帰んなきゃな」

「マスターってどんな人なんだ?」

妹が興味津々といった感じで聞いてくる。

「マスターは、まあ話した?と思うけど、ギルドマスターをやっている。」

それで、一人だった俺を拾って、養子として置いてくれる事になった。

それは一週間ほど前ぐらいのことかな?

それで、魔力検査して、魔法を教えてもらった。

因みにマスターは、何と内的魔力に光属性があつて、外的魔力でなぜか闇属性を使える。

すごいよな」

「外的魔力で闇属性って……」。

そういえばさ、兄は内的魔力は伝説の天属性魔属性なんだよな?」

「ああ。それは言ったよな」

「それとさ、外的魔力って何が使えるんだ?」

「……………全属性」

「は？」

「だから、火、水、風、土、光、闇。全部使えるんだよ。外的魔力操作だけで」

「はあああああ！？」

「だから、女の子は大きい声出しちゃ駄目だつて」

「そ、そそ、そんなこといったら、マスターよりも兄の方が反則じゃないか！」

さすがに正面から言われたら返す言葉が無いな……………。

「……………さ、行こうか妹」

「（この人スルーする気だ。誤魔化すつもりか！）あ！ 待てよ！」
そんな感じで歩いていく帰路。

第二十二話 帰路、妹鷲（後書き）

妹鷲は造語。

第二十三話 第二回鉄拳制裁タイム

妹も居るので、程々の外的魔力強化をして、四、五日程度で帰った。100?を四、五日なんて滅茶苦茶な早さで帰れたのは、ひとえに妹の強化魔法の熟練度のお陰だった。

俺が本気で、許容量全部を強化魔法に費やしたなら、妹の全力の軽く数倍はいくのだが、

滅多に全力は使わないので、いつも使っている程度で走ると、なんと妹もそれに軽く追隨してくるのだ。

「お前、強化魔法得意なのか？」

「そりゃ、一番得意だ！」

内的魔力で一番高い適正の風属性だって、強化魔法の方がやり易いし」

「へえ、そうなのか……………」

こんな感じである。

一番得意と言うだけあって、凄く速い。

なので、100?を四、五日で行けたのだ。

それで街についてみると、

「おおー！ー！これが首都かあ！

凄いでかいな！ 人も沢山いるぞ兄！」

こんなんで、凄い、何と云うか、

「和むなあ……………」

口調はともかく、始めて見る街の賑わいだ。
凄い癒されるな。

……爺臭くなってきたな、俺。(こつちに来てから)

「なあなあ兄！ あれ何だ！？

これ買ってくれよ！ なあこれって……………」

街の男共の中にニヤニヤした目つきの奴がいる。

まあ、元々が良いアリアだ。

顔も十人中八人が振り返りそうで、(そこ！ 中途半端とか言うな
！)

プロポーシヨンも同じ年と比べたら結構いい方で、
だが、引き締まってる体だ。

まあ、見てるだけならまだ良かったんだが。

「なあなあ、俺達とちよつと来ない？」

「そうそう、可愛い姉ちゃん、ちよつと一緒に遊ぼうぜえ」

やはりテンプレの如く現れるやられ役。

妹はその気が強い男勝りな性格が災いして、

「あ！？ テメエらと遊んでる暇なんて無いんだよ。
とつとと失せる」

今までで一番ガン垂れていた。

うつつ、妹が非行に走ってしまった！

お兄ちゃん悲しいよ……。

するとやられ役のテンプレモブA・Bが、顔を真っ赤にして怒鳴る。
「……か例えが多い。」

「んだとこの女あ！ 下手にでてりゃあいい気になりやがって！」

俺は黙って妹と男達の間に出る。

「あ！？ てめえそこの女の知り合いかよ？」

「きょうだい兄妹だ」

「きょうだい姉妹？ はっはっは！ 笑わせやがって！

妹も生意気だと思ってたら、姉まで馬鹿だったとは！」

「……今こいつなんて言った？」

もう一回リプレイしてみよう。

『姉まで』

……………間違えたら、男には鉄拳制裁。てっけんせいさい女には、鉄言てつげん制裁。せいさい

「お前ら二人」

「あ？」

「何だよ？」

後ろで妹があーあと二人の犠牲に追悼（偽）してる。

「俺は、お・と・こだああああああああああ！」

「はっ！？ え？ ちょ！ わ、悪かつぎやああああああ！」

「いやがぎやああああ！」

ボコッ、ドカツ、ゴスウ！

僅か二分後。

「俺は男だ。そして姉妹ではなく兄妹だ。
分かってくれたか？」

「は、はいいい！」

「すっ、すうみやせんでったー！」

いやいや、二人とも物分りが良くて助かった。

「さて、アリア。マスターの所に行くよ」

「あ、ああ。分かった。（怖いな）」

まったく、この頃男と女の区別がつかない奴が多すぎ！服見る服！
この凶悪な服を女が着るわけねーだろーが！

まあ、この世界に来てから二度目の鉄拳制裁だった。

第二十三話 第二回鉄拳制裁タイム（後書き）

しばらくはシリアスは無い、と思います。

皆さん。

どっかからの引用でもいいので、

アリアの武器・戦闘時服装のアイデアを私に提案を！

どうか感想に書いてください！お願いします！

鉄拳制裁と大覇星祭って、なんか語呂が似てる（笑）

第二十四話 付与魔法研究？

「遅かったな。何処まで行って、何処で女連れ帰ってきたんだ？」

「違う！ 女じゃなくて妹！」

「どうもー。妹のアリアです」

「あ、そうなのか。って！ 養子二人目にしろってことか！？」

分かんと思うが、今はマスターの書斎にいる。
つい先ほど帰ったのだ。

「はい。アリアにも色々と事情があって……。
アリア、話しても良いか？」

「いいよ。これから世話になる父代わりの人だからな。
後、マスター」

「何だ？」

「少し地下の訓練場を借りて良いでしょうか？」

「ああ。良いぞ」

「ありがとうございます。」

アリア、マスターに話をしたら地下に来てくれよ」

「ああ！ 分かった！」

マスターに地下の扉を開けてもらい、一人で地下の訓練場に来た。
もう俺が落とされた穴は無かった。

「さて……………」

ここでやる事はいくつかある。

それは、ディアボロス悪魔の王と戦ったときに出来た魔法と、武器の確認。

あの時、俺は今腰に付けている太刀は使わなかった。

アイツが相手の場合、その判断が命を救ったわけだが。

しかし、今のうちに刀の使い道を考え、今俺が使える有効な攻撃を
確認しなければならない。

左腰のベルトにささっている鞘から出ている柄を握り、一気に刀を
抜き出す。

しかし、相変わらずでかい。

「……………」

無詠唱による、外的魔力付与。

まだ目に見える程ではないが、宙を漂う外的魔力が刀に纏われてい
くのを感じる。

そしてその外的魔力に属性をつける。

「…………『風』」

やはりこれだろう。

まだ思いつきの段階でしかない魔法なので、失敗しては困る。

『火』を纏わせると、もし理論が間違っていたら、刀が燃えて煤だらけになって、使い物にならなくなるし、

『水』を纏わせて、あつという間に錆びるかも。という考えなので、やめておいた。

『土』に至っては、付与して刀が岩の塊になったらショックだから、だ。

しかし、『風』なら、刀に対して物理的な影響はほとんど無いし、前にも言ったとおり、超能力時代で使いまくったので、やり易い。それに、ディアボロス悪魔の王と戦ったときも、『風』には凄く助けられた。

超能力も、隙をみては偶に練習し、制御と応用を繰り返している。床、壁を操ったり、空気を操ったりしている。

右腕のメンテも完璧だ。

どうやら、死んだ時に（死んでない！）懐にマニュアルをいれていたからか、この世界に一緒に来た。

しかし何故かこちらの人たちはこれを読めない。

まあ、考えるのはここまでにしよう。

目の前を見る。

「は？」

この頃この言葉が多い。

驚く事ありすぎだな。

刀の周囲10cm程まで風が纏っている。

何故分かるかというと、見えるのだ。

風が超高速で吹き荒れ、その部分だけ、暑くも無いのに陽炎のよう

な揺らぎが見えるからだ。

「すげえな。……………」『解除』」

と、その瞬間。

ドパアッ！

と、何かが発せられた音がして、
するといつの間にか刀から風が消えていて、

ドガガガゴゴ！

と、石が削られる音がして、

目の前の壁に、掘削機で掘ったかのような、
直径30cmの小さい、それでいて深い穴が開いていたのだ。

「『解除』についてもつと原理を追及したほうが、良いのかな？」

今の解除は思いつきり失敗だった。

刀に影響は無いが、壁が大変な事になった。

『解除』とは、その名の通り、付与魔法を解除するものであるが、
多分さっきのアレは、解除したのは『付与』という命令だけで、
風属性の外的魔力が吹っ飛んだのだろう。

「まあ、これはこれで、兵器認定？」

ここの壁は特別分厚く、頑丈に、頑強に作ってある。

超能力の前では意味が無かったが、中級魔法の特訓の時に何度も当

とても大丈夫だったからだ。

それに、……………推定10m程の深い穴を開けたのだ。

……これを兵器と呼ばずしてなんと呼ぶ？

「まあ、『風』終わり。次、『水』いくか」

しかし、さっきので、制御はできていたという自身があった。
なので、次に物理的影響がない『水』の付与を行う事にした。

これからももう少し、これからの事を考えても、

これから行くかもしれない『遺跡』や、戦つかもしれない魔物。
そして『ディアボロス悪魔の王』の事を考えても、

やはり新しい力が必要だろう。

しばらくはその研究をすることにした。

第二十五話 幕間（前書き）

前回？とかしときながら、いきなり幕間。

第二十五話 幕間

「……………暇だな」

声が響く。

其処は、黒かった。

全ての景色を黒く塗りつぶして、尚且つ全ての形が分かるような世界。

その中に、人がいた。

いや、人、というのも変だろう。

こんな何も無い所に居る時点で、おかしい。

そして、その人、いや、少年は、その黒い世界には不釣り合いな形容だった。

一言で言えば、美少年。

黒い世界に目立つ、真っ白な色。全ての色素が抜け出したような色。肌の色もそうだった。

服は、まるでどこぞの皇帝陛下のように、派手で、そして単純なもの。

しかし、見る人が見れば分かるだろう。

この少年は、普通ではない。

「この前の様に面白い事はやはり早々には起こらぬか」

少年は、その容姿と相まって、賢人のような喋り方をする。

「……やはり我直々に向こう側に行かぬとならぬか」

「なりません！」

いきなり大きく世界に響く声。

それは、まるでいきなり、だが元からいたような雰囲気醸し出す。と、少年の前に人影が居た。

瞬きをする瞬間を突くような、何時の間にかという感覚。そしてその人影は喋り続ける。

「ついさっきまで向こう側へ、精神で行かれてたじゃないですか！
今になって本体でいこうなど！ 許しませんよ！」

どうやら人影は女であった。

紫の、地面にまで着きそうな長髪。

切れ長の瞳の、どこか妖艶さを醸し出す容姿。
黒い服。

露出度を気にしてませんと言わんばかりの鎧。
だが、その見た目とは裏腹に、話し方からして真面目な性格のよう
だ。

「我は私の好きなようにする。」

それに、また会って、戦いくさをするのだよ。

今度は『天使エンジェルの末裔』も含めた多対一だ！」

「だから！ 駄目ですってば！ いい加減怒りますよ！？」

「……年下のお前に言われても、なあ？」

「だーからー！ ……………」

一変、まるで何処かの我侭王と従者の様な、可笑しい一面が其処にはあった。

S I D E C H A N G E

深い山の奥。

樹海と言っても差し支えない、到底人が住むべき所ではない場所。

「これで最後」

白いフードを目深に被った、顔も性別すら分からない者が、血の海の中で立っている。

目の前には、その者が言ったであろう最後がある。

それは、魔物だった。

しかし、それは明らかに普通の魔物では無かった。

それは、ビッシリと、深い毛で覆われた体。

背中から生えた黒い翼と、横にある四本の腕。
しかし、それでも顔は、人そのものであった。

その、人にも見えて人でないものが、五体バラバラになっていて、
どれが誰のパーツかなど、それをやったフードの人本人でも分から

ない程であつた。

「……終わり。次は………！」

フードの人が驚く素振りを見せる。

そして、小さく呟く。

「……久しぶりに会うのか。

どんな奴なのか。『覚醒』はしてるのか？

「………まあいい。今は己の使命を進めるのみ」

そして、一度もそのフードを取らずに、その人間は、樹海の奥へ消えていった。

第二十五話 幕間（後書き）

フードの人間の正体は？

次回、付与魔法研究？

第二十六話 付与魔法研究？（前書き）

「まるに」です。

まるきゅーまでは続きません。あしからず。

第二十六話 付与魔法研究？

「……『水』」

その瞬間、ドバアツと轟音が部屋内に響き渡り、何も無い場所から水が生まれ、それが段々と流れを持っていき、刀の刀身部分のみに集まる。

刀身部分は、今度は本体から5mm程度しか付与されてなく、水はほぼ透明。

しかし、流れだけは、そこらの洪水やダム放水の軽く10倍は越すであろう、

肉眼で見えない速度で刀身の表面を奔っている。

「……試し斬りするか」

さっきの、風属性付与で、

自分で触れなければ、特に問題無いという感じだったので、今度は試し斬りしてみることにした。

壁に近づき、左手で壁に触れる。

「能力発動。『変形』。対象、壁」

その瞬間、触れている場所を中心に、壁が円状に凹み、そしてその分の石が、部屋の中心に出た。

「成功だな」

更に壁に近づき、水属性付与を施した刀を構える。

「ハッ！」

そして、横薙ぎに振る。
と、

スカッ

「あれ？」

少し体勢を崩してしまったが、もう一度立つ。

今のはおかしかった。

絶対必中距離なのに、セフィ ス級太刀の横薙ぎで外した？
絶対にさっきの感触は、空振りした感触……………。

「嘘だろ？」

やっぱりこれを言ってしまった。

勿論、それに匹敵する事が目の前にあるのだが。

今、俺の目の前には、俺が見下ろす形で、壁が立っている。
見下ろす形で、だ。

そしてその奥、向こう側には、手前が斜めに削られている壁の上。

「マジかよ」

つまり、俺のあの太刀は、

水属性付与をしたことにより、科学の力である、『高水圧カッター』みたいな感じになっていたのだ。

なので、感触が殆ど無く、そして、切れ味が爆発的に増したから、逆に体勢を維持できなくなったのだろう。つまり、勢いが強すぎたのだ。

「高水圧過ぎだろ」

はつきり言つと、目の前にある壁は、高さ3m、厚さが30cmもある。

よくぞここまでを魔法で再現できたものだ。

俺は、また一つ、魔法に対して関心を持ったようだよ。

すると、

「兄ーーーー！」

「お！ アリアか！」

後ろにある扉から声が聞こえたので、振り返ると、妹がいた。

「もう話し終えたのか？」

「ああ。それで、私も面倒見てくれるってさ。良い人だね、義父さんも」

「ああ。マスターはああいう人だし、そこが良いんだけどな。それで、どうする?」

俺は妹に問いかけながら、水属性付与の刀を一振りし、外的魔力を霧散させる。

今度は、解除魔法に工夫を加えてみたので、さっきのような事も起こらず、外的魔力は無くなった。そして刀を鞘にしまう。

「どうするって?」

「これから、だよ」

俺はフツと笑って、妹に言う。

「決まってるだろ」

妹は、いつもと変わらない口調で、俺の笑みに満面の笑顔で返しながら、

「私と模擬戦しよーぜ!」

「……………バトルマニア（半戦闘狂め）……………」

結局、妹がどうしても頼むので、一回、妹の実力を見るために、模擬戦する事になった。

……………いつも思っけど、急じゃね?

第二十六話 付与魔法研究？（後書き）

次回、妹と兄の戦いです。
そして分かる妹の実力！

第二十七話 付与魔法研究？with妹

今、妹と、距離をとりながら並走している。

勿論模擬戦だよ？

妹の武器は、短剣と投げナイフと、内的魔力による風属性魔法。妹によれば、これ以外にもいくつか内的に使える、と聞いたが、マスター。それは滅多にでないんじゃないのか！

「おいおいおいおい！」

「属性付与！ 『土』！」

次の実験。あの、形が変にならないか心配されていた土属性付与を、妹との模擬戦中にやった。

妹は現在進行形で驚いている。かくいう俺もだが。

また変なのができる。

刀全体が、石や砂、岩や瓦礫などがき集め、押し固めている。綺麗な形の太刀のはずなのに、モン　ンにでてくる『ブリュンヒルデ』をもっと無骨にした感じになってしまった。

「重いな。一撃重視型？」

ならばそれはあまり意味が無い。風属性付与だって、水属性付与だって、軽いままで

どっちにしたって威力は凄い高い。まさに相手を即死させる為のみのみだだった。

だから、重くなるという代価を払ってまで、威力を高くする必要はない。

「おいおい兄！ そんなノロい攻撃なんて当たらないよ！」

そうなのだ。コイツは、とにかく速いし、素早いし、フットワークがある。

純粹な速さだけなら俺が勝てるが、それ以外が妹は凄いのので、模擬戦なら、俺並みに速く動けなければ追いつけない。

俺は、重さと、空気抵抗によってなるノロさを我慢しながら、ブン、ブンと、その大剣で宙で空振りしていた。

「ハア……水や風と違って、そう簡単に結果は出ないか……」

俺はこのままでは、動きが制限され、妹に半ボッコにされてしまう可能性があったので、早々に土属性付与を止め、火属性付与をする事にした。

「『解除』……アレ？」

解除魔法が効かない？

おかしいな。水のとくに直したはずなんだけど……。

「『解除』！」

気合を入れたけど無理でした。

「何一人でやってんだよ！

風の精霊、我に答えよ！ 『ストーム・ダンス』！」

その瞬間、視界から消える妹。

今は確か風の補助魔法。

俺がいつも超能力でやっている事の劣化版を、魔法でやるものだ。
因みに初級だな。

「ヤバっ！　ぐふう！？」

鳩尾に思いつきり蹴りを入れられた。

「痛ぁ！　こ、の、やろぉー！」

野郎じゃないけど。

土属性付与されたままの一撃を、自分の正面真下に撃つ。
するとその時、

「は！？　なんだこれ？」

体が赤褐色の光に覆われ、そして、

ドゴオオオオオオオオオオオオ！

と、まあ、擬音で表すならこれぐらいの、鼓膜が破れそうな音が響いたと思ったら、

「「あ、あれ？」」

妹と声が重なった。

それもそのはず。

目の前には、焦土と化し、俺の正面100m程抉り取られた地面。そう。地面だ。

部屋の中で戦っていたはずなのに、地面？

すると、

「この馬鹿野郎どもがあ！」

「ヒイっ!？」

「ま、マスター？ 此処は何処です？
今、一体何が……」

「……ここは街の外の更地。
ここにるのは私が転移させた」

「なんでそんな事を？ 兄と楽しんでたのに」

「ハア、だからな、お前の兄が、その持つてる剣で、部屋を倒壊させるような

攻撃を放ったから、直前で転移させたんだよ」

「「転移？」」

「まあ、そんなことはどうでもいい。

お前ら！ 私の家を壊そうとした報い。うけてもらっつー!」

そして手をワキワキと動かして、目を光らせながら近づくマスター！

「ぎゃ、ギアアアアアア！……！」

この叫び声、街まで聞こえてたそうです。

第二十七話 付与魔法研究？with妹（後書き）

転移は、現存しない魔法です。

その内部事情はちゃんと話しますので。

第二十八話 横暴だ！（前書き）

一章よりも凄く長くなるような気がしてきた今日この頃。

第二十八話 横暴だ！

「で、さっきのは何だ？」

「「こつちが聞きたい！」」

今は、街に入って、またマスターの家の地下の部屋に来ている。
今度はマスターも一緒に。

「私は、書類仕事も終わったし、地下を見てみようと思ったただけだ。
そしたら、その馬鹿息子が家をぶっ壊すような魔法を撃とうとしてる」

「え？ ちょっと待ってくださいよマスター。」

俺は別に家を壊すほどなど……」

「いやいや、あの時のアイ兄の魔力からしたら、家＋が吹っ飛んでたと思うよ私は」

それを聞いて呆れるマスター。

「まったく。魔力量操作は基礎中の基礎として教えたはずだが？
何をやってるんだ」

「いや、それは、新しいオリジナル魔法を考えて……」

「！？ お前がオリジナルか……。もうそこまで。」

まあ、今回は私が居たからいいが、今度からは気をつける！」

「はい！」

「あの、アイ兄も思ってると思うんだけど、転移魔法って何？」

そうだ。

転移魔法なんて教えてもらわなかった。

この世界は、魔法はあるが、転移・転送系は無いのだ。
従って、俺と妹と自分を同時に転移できるはずがない。

「ああ。それはこの部屋の元々の持ち主の仕様だよ」

「「元々の持ち主？」」

「そうだ。」

私の先祖が作ったのがこの部屋で、
家は改修が続けているが、部屋だけは残っている。

そしてこの部屋を作った先祖が、ここに変なトラップを仕掛けたんだよ。

どうやるか原理を知らないが、街の外に転移できるトラップをな。
今はそれを緊急離脱用として使っているのに過ぎない」

「そうだったんですか……。」

あ、そういえば俺の刀！」

思い出して自分の刀を見る。

……………良かった。どうやら土属性付与魔法は完成らしい。

「それでさ、兄。今めっちゃ暇なんだけどさ、
何か模擬戦以外にやること無いのか？」

確かに。模擬戦でもやったらまた飛ばされる可能性大だし。
やはり、訓練にもなる暇つぶしが良い。

そして、『遺跡』が見つかったら行く、という形が望ましい。

「ああ。それならほら、これ持っとけ」

「「？」」

俺と妹に投げ渡される一枚のカード。
カードには、Bと刻まれている。

「こ、これって！」

妹が随分驚いてる。

「これなんだ？」

「それはギルドカードだよ。

アイはもうEランクのカードを持ってると思うが、
これからはBランクだ。おめでとう」

「はあ！？ え、そんないきなり！？

何でBランクなんですか？」

「そうだよ養父さん！ 何でアイ兄がBで私がEなんだ！？」

あ、やっぱり妹はEからなんだ。

「ああ、それについてなんだが。」

アリア。聞いて驚くな。アイはあのフェンリルを倒したんだ」

「はあああ！？ な、何だよそれ！ 反則だろ！」

「だから女の子が大きい声を「そんなのどうでも良い！」……」

「さっさと説明しろおっ！」

「ハア……（横暴だ）分かったよ……」

妹は横暴でした（今更）

第二十八話 横暴だ！（後書き）

どうか感想を……求ム

第二十九話 初！依頼（前書き）

はじめてのおつかい（依頼！）

第二十九話 初！依頼

「で、結局ここに至る」

「……………」

あれ？

妹が呆然として無反応です。

実は超能力の事教えました。

マスターからも、教えておいたほうが良いって言われたし、
いつか話そうと思ってたから。

だけど、世界転移？の事については話してません。

「おーい、アリアー？」

「な、何で黙ってたんだよおーー！！」

バキッと一発

「グバはアあッ！？」

「そういう事は最初に言ってくれよ！
私達家族だろ！？」

「……………すまないな。心配かけたくなくてさ」

すると少し頬を染めてバツが悪そうに顔を背ける妹。

「うつ、だ、誰が心配なんかするか！
そ、それより養父さん！ 暇潰しって何だったんだよ」

「ああ。そりゃ、ギルドカード渡した時点で分かってるだろ？」

やっぱりそうか……。

「依頼、ですか？」

「そうだ。次の遺跡に行くアテが出来るまで、依頼でもやっておけ。
魔法の訓練と金をためるためにでもな」

その瞬間、妹が俺の手を掴んできて、

「よし！ そうと決まれば直ぐ行こう！
兄！ 最初は私のランク上げに付き合って！」

「あ、ああ。別に良いが……」

まあ、依頼をすれば妹の実践訓練にでもなるし、金も貯まるしな。

「おつ、そうだ。これ持っとけ」

扉から急いで出ようとすると、マスターが何か二つ投げてきた。
それをキャッチする。

「これは？」

それは、二つのバッチだった。

あの、襟元につけるタイプのそれには、剣と剣が交差している模様

が刻んであった。

「それはこのギルドマスター直々に依頼を伝えるほどの強者。しかも人格も判断して渡されるもので、それがあれば色々と便利なんだよ。」

それ、常時付けとけ。絶対に盗られるな。

はい、いつてらっしゃい」

「分かりました。いつてきます！」

妹と共に家を出て、ギルドの建物に向かった。

そして此処はギルド。
扉を開けて中に入る。

やはりそこは、男ぐらいしかいないムサイ場所……………ではなく、
女子供もいる、普通の建物だった。

「ここがギルドかぁー！」

「ん？　アリアは初めて来たのか？」

「ああ！　ナイフとか短剣、魔法の訓練は独学だったから。
だから依頼受けるのも初めてなんだ！　楽しみだよ！」

「そっか……………」

妹が眩しいなあ。

そして受付嬢の窓口へ行く。

「こんにちは。久しぶりですね」

「あ！ この前の無茶苦茶な人ですね！
依頼ですか？」

「（無茶苦茶って……）はい。
BランクとEランクと一緒にできる依頼ですけど、何かありますか？」

「……そうですね。規則ですと、
その組み合わせならば、一応Bランクは大丈夫ですけど。
高ランク保持者は、低ランク保持者が居ても、
そのランクの依頼を受ける事ができるので」

「そうですか。ならBランクの依頼を一通り見せてもらえないでしょうか？」

「こちらです」

そうして渡された帳簿を開くと、様々なBランクの依頼があった。
それを妹も横から覗き込む。

妹が呟く。

「え〜と……『ダークサーヴァント二十体討伐』、『未完成暴走ゴ
ーレム三体討伐』
『ラピスレイズドラゴン古龍種一体討伐』、『キマイラ中型二体討

伐』

って、これ討伐依頼多いな」

「そうですね。Bランクから、討伐依頼が主となり、レベルも桁違いです。

ですが、あくまでもBランクなので」

「うーん……アリア、何かやりたいのある？」

「そうだな……あ！　これなんてどうだ？」

妹が帳簿をめくって、俺に見せてきた依頼。

それは……

「『男爵級悪魔撃退』！？」

何かその依頼名に、

これ本当にBランク！？と心の中で叫んだのは言つまでも無い。

第二十九話 初！依頼（後書き）

悪魔です。きっと何かがあります。

第三十話 依頼、男爵級悪魔撃退（前書き）

もっと長く書きたいよー！

第三十話 依頼、男爵級悪魔撃退

皆さんこんばんは。アイ・M・ウィルドレースです。
喋り方が違うのは気にしないで下さい。

前回、何とBランクの依頼の中で、悪魔の撃退をする事になりました。

しかし、この悪魔撃退。

『撃退』と言っているように、討伐成功は数少ないそうで、しかも撃退には、そのランクの保持者が最低五人はいて、連携を取らなければいけないそうです。

まったく妹は何を選んでいるのやら。

一つ、ここで悪魔の階級についてお話します。

悪魔には、階級、とは言っても正確には爵位と言います。

爵位には、いくつか段階があつて、

下位から、『王』、『親王』、『大公』、『公爵』、『侯爵』、『伯爵』、『子爵』、『男爵』と、いくつもあります。

今回の悪魔は、男爵級らしいので、一番弱いです。

まあ、人間からしたら、それでも死にたくなる強さらしいですけど。
そして今は、その男爵級悪魔の撃退に行く愚かな二人組として、馬

車で送ってくれています。

悪魔撃退依頼や、その他の難易度の高い依頼には、専用馬車が送ってくれるそうです。

……この喋り方もいつもと違いめんどくさいので、元に戻します。

「なあアイ兄、いつになったら着くんのだ？」

「……お前はいつもそれだな」

「だってよ！　こういう時って暇じゃん！
景色だって眺めるもんなんて無いし！」

まあ、確かに、馬車の窓から見える景色は、殺風景。
荒野の真ん中を走っている。

するといきなり、

キキィ！

と音がして、馬車が止まる。

そしてギルド派遣の御者さんから声が聞こえる。

どうやら、悪魔を撃退してほしいと連絡のあった村についたようだ。

俺達二人は馬車を降り、村の入り口らしき場所に入る。
随分人影の少ない村だ。

「さて、ここの村長さんにでも事情聞くか？」

まあそれは定番だし？
だが妹は首を横に振って言う。

「いやいや、その必要は無いみたい……だよ？」

「ん？ 何で分かるんだよアリア」

「だって、ねえ？」

どこか驚いているような、緊張しているような感じの動きをする妹。

「だから、理由を言えって」

「その、ね？ あれ見てよ」

妹が冷や汗かきながら俺の後ろを指差す。
あれ？ 前にもこういう事無かったっけ？

後ろを向いて、妹が指差した場所を見る。
それは、村の入り口にある看板に貼ってある紙だった。

「えーと、何なに？ 『悪魔崇拜の予定日・毎日の朝八時』」

「……………んじゃこりゃああ！ 普通こんなの平然と貼るか！？
舐めてんのか！？」

「いや、私が思うにさ、こんなの貼ってるのが普通、ってことじゃないの？」

「それって……やヴあくね？」

マジでヤバイな。

「そりゃそうだろ！ この村全体が悪魔に侵略されて、しかも洗脳か信仰かしらないけど
凄いことになってるよな！

私達がここに入ってたって事は……

悪魔+この村民も、『敵』だってことだよ、ね？」

「……………」

第三十話 依頼、男爵級悪魔撃退（後書き）

アイ達是对人の覚悟を決められるのか！？

次回、お楽しみに。

この頃学校が忙しくて、更新が遅くなりそう。

まあ、今日遅くなったのは、無回転寿司にいったからですけど……。

第三十一話 発射！『ジエノサイ プレイバー』（前書き）

何かシリアスじゃ無くなったのに
気付いたのは、書き終わった後。

第三十一話 発射！『ジェノサイ プレイバー』

「……アリア、今度こそ、人を殺す覚悟をしておけよ」

「あ、ああ……」

俺は前の世界で、ホムンクルスという化け物と戦ったが、奴らは人間にそっくりだった。その中身を除いて、

だから、きっとやれるはずだ。

そう自分に言い聞かせ、村に入る。

と、その瞬間、

「「！！！！！！」」

周りの家々から、禍々しい殺気が溢れ出た。

「これはもう駄目だ。妹、絶対に殺せ。

殺さなければ村民が救われない」

「分かってるよ……」

これは知識として入れたのだが、

悪魔。それは人の『弱み』、『怒り』、『憎しみ』、『恨み』、『悔い』。

それら全てのどれかを掌握し、自分の崇拝者として崇めさせる。

人は最初は抵抗するだろうが、

悪魔を崇拝する事で起こる一時的な安心感に囚われ、そして、抜け

出せぬまま悪魔の言いなりになる。

この安心感は、悪魔崇拜における信者から魂の欠片を抜き出す際に
でるものらしい。

なので、一回悪魔に掌握された魂は永遠に現世に留まり、成仏でき
ない。

だからこそ、そのような者達は、殺してあげるしかない。

と、考え事をしていた次の瞬間、村民が家々から出てきて、俺達の
周りに集まりだした。

その村民の顔は、真っ青で、目は虚ろ。

だが、確かにそこにはボロボロの、悲しい魂があるように見えた。

そして、完全に包囲すると、俺達の前の列が左右に分かれ、

その、元凶たる男爵級悪魔が姿を現した。

「お前らか、この俺様の土地に無断で入ってきた奴つてのは！」

その姿は、あの典型的な、神話に出てきそうな悪魔だった。

黒い体毛に覆われ、そして山羊のような顔と角を持つアレだった。

だが、しかし、相手の力量も知らんで男爵が威張るか？

おっと、少し冷静になったほうがいい。

今のところ全村民が分からないが、大量の人間が俺達の回りを囲ん
でいる。

一つの視界に、少なくとも50人は映っている。

この村の規模からして、もっと居そうな気もするが。

「お前が男爵級悪魔？」

「いかにも！ 我がこの地を統治する悪魔だ！」

……それってただの左遷？
と思った。

「ここにいる崇拜者達は、この村の全村民？」

「そんなことを聞いてどうする？」

「助けるんだよ。残りが居れば、だけど」

「え、ちよっ！ 何いきなり言ってるの兄！？」

「ハッハッハッハ！ 舐めるなよ！

この村民達を殺す勇氣などない癖に！」

「……答える」

「そうだな。半分、といったところか。

この村は昔からこの地に住まう神を崇めていてな、
だから信仰心が強いのだよ。

まあ、生き残りどもは全員、捕らえてあるが。

男は貴重な労働源、女は貴重な慰安源だからな！

人間の女はうまいのだよ」

それを聞いて悪魔を睨む妹。

「最低！ 兄、どうする？」

「……俺が攻撃する。」

隙をついてお前は包囲網を突破、村民を捜し、救助しろ」

「わかったよアイ兄！

風の精霊、我に答えよ。『ストーム・ダンス』」

ボソツと呟くようにして魔法を唱え、身体強化する妹。
よし。

「悪魔！

それじゃあ勝負といこうか！」

刀を構える。

「付与、『土』。行くぞ！」

土や岩石、瓦礫が刀に押し固められる。

ブリュンヒルデっぽい大剣を構え、そして、アレを使う！

魔力が剣に集束し、大剣が赤褐色の色の光を纏い、

段々それが俺に伝わってくる。

「いけ！ 『ジェノサイド レイバー』……………」

その瞬間、視界が赤褐色の光に包まれた。

第三十一話 発射！『ジエノサイ プレイバー』（後書き）

最後ので完璧にネタ化したこの話。

第三十二話 g d g d で、見ると作者の手抜き加減が分かる（前書き）

何かいきなりシリアス兼コメディの中の、
どっちでもないつなぎ話ができました。
手抜きですみません。

第三十二話 g d g d で、見ると作者の手抜き加減が分かる

「あゝあ……」

見渡す限り、敵はいない。

まあ、さっきの、初めて実践で使ってみた『土属性付与魔法』によつてできる、

波動？のようなものを発射したが、
いかんせんパワーが「俺 T U E E E E E E」状態になっているので、
なんとも制御が難しい。

とりあえず、今は超能力をほんの少しだけ併用して使いこなしている。

だが、威力だけはどうにもならないので、
一部の敵を吹っ飛ばすつもりが、周りにいた元村民が全員塵になった。

それに男爵芋もない。

妹はとっくに行つたよ？

「こんなもので死ぬか」

「……なんだ、まだ生きてたんだ」

目の前にいきなり現れた男爵君。

服は元々着ていなかったが、なんか体がボロボロだ。

「そうは言ってもさ、もう満身創痍って感じだぜ？」

「悪魔を甘く見るなよ人間？」

さては悪魔と戦うのは初めてか！　そうかそうか！」

「そうだけどさ、何かムカつくなお前、何が言いたい？」

「ふん、『土属性』如きで悪魔を倒そうなど、温いわ！
男爵を舐めるな！　『ヘルキメラ』！」

詠唱も何もない魔法で、いきなり地中から出てくる、
まあ俗に言うキメラ。キマイラでもいいよ。

「悪魔の使い魔に勝てるか？」

「……付与、『水』」

刀に薄く水の膜が張っていく。

「だれが負けるかよ、雑魚が。話数稼ぎに出てんじゃねーよ。さっさと消えろ」

シューイイイーン！

と音がして、そして次の瞬間、キメラの体から真っ黒な血が噴出し、消滅した。

「な！　なんだ今のは！」

「……答える気はない。今話で終わらせてやる！
さっさと消えろ！」

現世に存在する根源に宿りし全ての光よ。我、世界の跳躍者に従い、敵を正し滅せよ！

光の幻想、『ファンタズム・ホーリー』！」

「え？ それって！ しかも『跳躍者』って！ 嘘だろ！？
ってギャアアアアアアア！！！！」

ここでまた悪魔についての話をしよう。

悪魔、というものは、普通の属性魔法は効かない。
いや、効くには効くが、すぐに再生するのだ。
それがたとえ『光』属性であろうと。

だからこそ、『魔』にたいする唯一の属性。そう、『天』属性である。

闇には光だが、魔には天だ。

だから、こんな次の話のつなぎ程度にしかない所に、
あの『悪魔の王』^{ディアボロス}と戦をした時に発現した魔法を使ったのだ。

「……やりすぎたか」

俺の目の前には、荒地が広がっている。

俺を中心にクレーターが出来ていて、多分半径50mはあるだろう。

妹とその他の皆さん。どうか範囲内に居ない事を祈ります。

「……おい作者、いつまでこのg d g d話を続けるんだ？」

……次回、久々にアイツが！

第三十二話 g d g d で、見ると作者の手抜き加減が分かる（後書き）

次回からは思いっきりシリアスになります。
多分。

第三十三話 『再臨』（前書き）

再び臨む、ソレ。

第三十三話 『再臨』

アイがあっさりと男爵級悪魔を倒した時から少し遡る。

＼アリア SIDE＼

「さてと、ここまでなら何も来ないだろ」

まったく、アイ兄がやった、私との模擬戦で使ったやつをあっさりと使った。

あれって周りの事考えない武器なんだからちゃんと自重しろよ！

「だけど……こりゃ正確な場所も聞きだすべきだったか？」

この村。最初の村民は全村民の半分と言っていた。

視界に入る分は50人だったが、多分あの時は軽く数百人いた。

だけど、そんな大人数を監禁しておける場所ってどこにあんだよ！

「……………ん？ あれって……………」

丁度、多分村の真ん中ぐらいの所で、宙から辺りを見渡すと、

一つ、やけに大きい家があった。

多分村長とかそんな感じの家だろ。

まあ、怪しいとしたらあそこだろうという考えで、その家に向かって走った。

「……これ益々怪しいな」

大きい家の入り口の前に来ると、はっきり見えた。

扉の内側から外側に、紅く、何かが引き摺られた跡があった。

「これ血か……」

扉を開けると、ムワツと血の臭いが広がった。

気持ち悪い。この匂いを嗅ぐだけで、あの時の光景が、あの、時の

……

「う……う……う……う……う……」

一瞬何かがせりあがる様な感覚が喉の中を駆け巡り、次の瞬間、出してしまった。

「う……」

こりゃ、また兄に『女の子がはしたないぞ！』って言われそうだな。いや、こういう場合は『大丈夫か？』か？

そんなふざけた事を考えながら、部屋の中へ入った。

床には、まだ血の跡が残っている。

それを辿っていくと、書斎のような、一際他の部屋よりも広い部屋に入った。

その血の跡は、目の前の……何だ？

「隠し階段？」

血の跡は、開きっ放しの隠し階段？に続いていた。

とりあえず、中に入ってみる。

敵は悪魔だけだから大丈夫と思った。それに、『ディアボロス悪魔の王』と
互角に戦った兄が負けるとも思えない。

下に続く階段を降りる。

と、階段が途切れたそこには、

「何だよ、これ……」

牢屋があつた。

牢屋の中には、表情を見なくとも憔悴しきった感じの人間が、
手錠と足枷で身動きを封じられていた。

見るからにどうやら男性と女性に分かれていて、子供もいる。
多分子供はまだ純粹すぎて、低級悪魔では掌握できない魂だったの
だろう。

一番近くにある牢屋を風の魔法で斬り捨て、中に入る。

「おいお前ら、大丈夫か!？」

牢屋の中は、とても暑く、 $\times \times$ の臭いがムンと鼻を突く。

そこは、私と同じくらいの歳の女子が集められた牢屋だった。

「う……あ……」

「いやいやいやいや……」

虚空を見つめるその瞳は、一瞬こちらを向くものの、それに私は映ってなく、また頂垂れる。

壁に向かって何かを見つめながら延々と呟く者も居る。

よくこれで信仰心だけでも守りきれたものだ。彼女らの抵抗が、そこには顕著にあった。

だがしかし、抵抗をしたからこそ、こんな目に遭ってしまった。

「ちくしょお！ 次だ！ 誰かいらないのか！？」

牢屋から一回出て、思いっきり牢屋が密集する部屋の中で叫ぶ。しかし、

『……………』

何も還って来ない。

声の一つもしない。

微かに聞こえるのは、力の全く入っていないうめき声だけ。

ここには、確かに悪魔には染まらなかった強靱な魂の持ち主が、それは多くいるのだろう。

だが、それだけ。

いくら強靱な魂を持っていようと、時間が経てば崩壊する。

それも、低級悪魔程度も掌握できない程に、狂う。

「くそお！ ちくしょおおおおおおお……！！！！！！」

周りから迷惑だという顔も向けられるわけも無く、ただただうめき声が聞こえるのみだった。

「お呼びかな、『天使の末裔』？」

「！ 誰だっ！」

いきなり後ろから声が響く。

それも、気配も何も感じさせずいきなり。

そして後ろを振り向きながら、聞こえる声。

この声は、

「誰だだと？ 笑える事を言う」

まさか、もしかして、

「もう貴様だつて知っておろう？」

この口調。

やはり、それは、黒かった。

「お前は！」

だがしかし、それは以前のものとは違い、『色』を持って、『姿』を持っていた。

「やっと分かったか。そう、我こそ！」

「悪魔の王！」

第三十四話 王の目的

SIDE アイ

「あれ？」

悪魔を跡形も無く消し去った後、妹の魔力を感じながら、妹が向かったと思われる方向へ歩いていった。

だが、いきなり、ここにも分かるぐらいな、膨大な桁外れの魔力が村を襲った。

「ッ！ 何だよこれ！」

その膨大過ぎて、目立ちすぎている、重圧となって襲い掛かる魔力を追うことにした。嫌な予感がする。

「何か知らないが間に合ってくれよ！」

両脚に外的魔力付与をして、能力で風の噴射を行い、今できる最大の加速をかけ、走る。

SIDE アリア

「『ディアボロス悪魔の王』！ 何でお前が此処に！」

「ふむ……それよりもまずはする事があるだろう『天使の末裔』？
生身の我に会えた事を喜ぶがいい！」

「！　そういえばお前、何で影じゃない！？
影を媒体にしなきゃこっちに来れないんじゃないのかよ！」

確かに。今の『悪魔の王』ディアボロスは、人間の姿をしている。

見た目の姿は少年。肌は、色素が抜けた白。
白すぎる白。だが肌色。

顔は、美少年というべきものだった。

もう少し成長すれば、10人中10人が振り返るような美少年になることだろう。

そして髪は、アルビノの、色素が欠けたような白。真っ白。紙のよう
に白。

「その質問には……後で答えよう。
それよりも、今は用があるのだ」

そう言つて、こちらへ歩いてくる相手。

「チッ！」

風の精霊、我に答えよ！　そして大いなる力、ここに顕現せ「待て
と言っただろう！」

何で、魔法が使えないっ！？

「この前のような影と一緒にしてくれては困る。
まだ『覚醒』も済ませていない四人の一人など、恐れるに足らん」

「お前の用は何だ！
私を殺すのか！？」

「自惚れも程ほどにしろ。」

我はこの村民に用がある。そうだな、先ほどの質問の答えにもなるだろう。

我のこの姿は、実体ある幻のようなものだ。

確かに力は変わらんが、時間が持たない。だから、描くのだよ。この村の、村民の血で、この村に、『召喚陣』を！」

「な！ お前まさか！」

「やっと気付いたか。」

そう！ 我は今、今日此処で、こちら側に『召喚』される！
そして戦うのだ！ 『跳躍者』とお前と！」

美少年が、その見た目の歳に合わない裂けた笑みを浮かべる。

「何なんだよお前は！」

『世界を纏めし四人の末裔』とか！
『跳躍者』とか『天使の末裔』とか！

訳分からない事ばかり言っつて、そうまでして戦いたいのかお前は！」

「そうだ！ 我は戦いたい！ 一戦いたい（殺しあいたい）！
折角の暇つぶしが見つかったのだ！ 我は王！ 傲慢だからこそ
王だ！」

両手を上にあげ、声高らかに叫ぶ『ディアボロス悪魔の王』。

「では、さっそくだが、生贄第一号はそちらの女にしよう」

私の後ろにある牢屋の中にいる、ずっと虚ろな瞳をしている女の子を指して、言う。

と、その瞬間、

ドゴォ！

と爆音が地下に響き渡り、そして土煙があがり、それが引いた所には、

真つ赤な血で染まつた壁や床、天井と、真つ黒く炭化した人間の残滓。

「な……てめえええええええ！！！！！！！」

「クツクツク！　そうだ、もっと血を！」

と、その時。

「あ、お取り込み中スミマセン。こちら『ジャンパー跳躍者』のアイになります」

！ 地下の雇の向こう側から、

何とも気まずい場所に入ってきた奴みたいな感じなアイ兄が入ってきた。

馬鹿やろー！ おせーんだよ！

第三十四話 王の目的（後書き）

次話、王の目的が明らかに！？

そしてその周りには、臍物やらなんやらが転がっている。

「そっか。そういうことか。」

でだ、アリア、これをやったのは……その生意気なガキか？」

「ああ……アイツは、「知ってるさ。『ディアボロス悪魔の王』」だろ？」！
何で分かって！」

「ほう、初見でよく私の本体を見破ったな。
さっきまでガキと言っていたのに」

「その『ガキ』って一言の時、お前から発せられた殺気ぐらい分かるよ。」

で、お前のその体……つってもまだ完全じゃないか。

あの時のお前よりは強そうだが、やはり本当ではないんだろ？」

「クツクツ。やはり『ジャンパー跳躍者』。お前は面白い！

まったく、向こう側からまたこちら側に来て少ししか

経っていないというのに、お前はとことん我を楽しませる！」

「その様子だとやはりか。
アリア、何か聞いたか？」

「あ、ああ。ソイツ、この村を生贄にして、自分の大規模召喚？陣
を作る気だ！」

それも、この牢屋にいる村民で完成するらしい」

ちっ、何だよ予想通りか。

予想通りでも最悪なパターンだが。

この世界に召喚陣なんてあったか？ 今度マスターにでも聞いてみるとして、

今はそれをどう阻止するか。

多分あいつの事だから、俺と戦う為だけで村民を殺す気だな。

「……なあ王？ やはりそれには『血』が無いと駄目なのか？」

「その通りだ！ 我と貴様の戦の食前酒いりつめいだよ！
我らの為に生贄になるのだ。本望だろう！」

何が食前酒だ。ふざけやがって！

「お前には失望したよ」

「ん？」

一旦笑いを止め、こちらを睨む『悪魔ディアボロスの王』。

「俺が認めた戦友、王は、今のお前みたいに無駄な血を流す奴じゃあ無い。

俺との戦いにのみ命を懸け、そして血を流す存在。
少なくとも俺はそう思っていた。

だが、やはり悪魔は悪魔。失望したな」

「……………だから、どうした？」

我はお前との戦いのみが真情だ！

その為なら、例えどんな犠牲でも払おう！」

やはりそう簡単に引いてくれないか。

まあ、一度殺しあった仲だ。性格なんて分かりきってるつもりだっ

たが……。

「どうしても、やるつもりか？」

「当たり前だろう？」

「そうか……」

刀を抜いて、刀身に、

「付与、『風』属性」

風が纏われる。

「お前との戦いはまだ先だと思っていたのだが、仕方が無い！
いくぞ「駄目です！」……………興を削ぐな！」

「……………」

あれ？ 今の絶対にバトルパート突入だったよな？

だけど、もう魔法使うのやめちゃったよ相手？

しかもその傍に、凄い露出の高い装備をしてる女がいるし。

「兄、あれってやっぱり悪魔か？」

戦いを見守るパートに入ろうとしていた妹は、

一瞬戸惑った後俺に言ってきた」

因みに相手は、その女と口論している。

「ああ、多分な。」

王と口論できる程の者と見ていいだろ」

それにしても……、まだ口論が続く。

何を話しているのか知らないが、

「長い……」

シリアスな空気が一変してしまったよ。
KY女。

第三十五話 再開、そして再戦。のはずが（後書き）

一気にまたシリアスでなくなった。

第三十六話 幕間・元世界（前書き）

久しぶりの登場。

第三十六話 幕間・元世界

場所は変わって。

……訂正、世界は変わって、ここは元々、御神哀という人間が、人によって作られた存在と戦い、敗れた世界。

そして、能力者保護の為の施設は、その敵によって壊滅的なダメージを与えられ、

更に世界は、人間と、反人間能力者との戦争が各地で行われていた。

〈元・『HEAVEN』領域内〉

傍から見れば、十人中八人が振り返りそうな美貌を持つ、中学生から高校生になるときの、何かが違ってくる年齢の女が、元『UnInstal』部隊本部のビルでの一室で、椅子に座っていた。

その部屋には、他にも四人程の人影も見える。

「……何でこんな事になったのかしらね……………」

少女は呟く。

しかしその質問に答える者はいない。

そして少女は顔を上げ、一人の男の方を向く。

「荒祇君。体の調子はもう良いの?」

「ああ。今は常時出撃体勢だ」

その男の横に並ぶ少女が男に言う。

「けど無茶するなよ?

……アイツに続いて、お前も、もし「その話は止めてッ!」

……琴雪……」

「きつと、きつと御神君は生きてるよ!

私はそれを絶対信じてるし疑わない! だから帰ってくるまで、絶対に忘れない!」

「……アイは、もし此处にいたら私達の事を何て言うんでしょうね
……」

椅子に座る少女の少し離れた場所で立っている、
どこか少女の面影もある少年がそれに答える。

「けど彼は、世界から恨まれている。

僕だってこんな事は言いたくないけど、もし生きてたとしても、無
事には暮らせない……」

少女二人が下唇を噛む。

悔しいという思いが駆け巡る。

と、その時、

「まずいぞ！ おいお前ら！ 遂に人間が仕掛けてきやがった！
早く準備しろ！ 長期戦だぞ！

……総隊長代理！ 早く指示をしてくれッ！」

顔に大きな傷の有る中年の男が部屋の扉を蹴り、開けながら言う。

その言葉を聞いた途端、部屋にいたメンバーは顔を強張らせ、

『総隊長代理』と呼ばれた、椅子に座る少女は椅子から立ち上がる。

「……どちらにしても、アイにこんな醜態を見せるなんて申し訳が
立たないわ！

支援隊長『佐屋明』！

陽動隊長『飛騨燃故』！

特務部隊隊員『涼風琴雪』！

『荒祇聊爾』！

『不知火奏華』！

現時刻、『総隊長代理』兼『特務部隊隊長』の佐屋紫の命をもって
して、

『HEAVEN』領域内に入る敵を撃退しなさい！」

「……はい！（おうッ！）」「……」

「では、敵の進行度と、それに伴う作戦を命じます」

敵は来る。

それも、能力者でも無く、本当の敵でも無い、『人間』。

それに対して、能力者は圧倒的人海を前に生き残れるか。

「アイ、見ていなさい！」

絶対に、貴方の信念を突き通してあげる！」

第三十六話 幕間・元世界（後書き）

紫はその実力と頭、そして『敵』との戦いで実力が認められた。

第三十七話 なぜ一緒にな？（前書き）

今回は一部のキャラ崩壊が激しいので、ご注意ください。

第三十七話 なぜ一緒に？

「……で、何でいきなりこうなる訳？」

今、俺と妹は村から出ている。

因みに、村からは数百人の村民が見送りに来ていた。

「まあまあ、アイ兄。これも……村民の為だつて。

……其処にソイツが居なければもつと良いんだけどな……」

妹が俺の横に並びながら、反対側を睨む。殺気が俺に当たるんだけどな妹よ。

俺は視線を反対側に向ける。

そこには、肌も白く髪も白い美少年が歩いていた。

「我こそ早くお主等と戦いっしょをしたい！

だが、まあ、今は、ちよつとな……？」

「そうです。私めが居る限り、貴方様に勝手な真似はさせる訳にはいきません。

これは向こう側の沽券に関わりますから。

元々、向こう側とこちら側は相容れない関係。

今から何億年も前にそう人間と契約したじゃありませんか。

それを貴方様はいつも……」

その少年のまた向こう側で歩いている、露出度が高く、胸元や下のほうが何となく危ない鎧を着ている女性が至極真剣な表情と口調で話す。

さて、なぜこうなったのだろう。
しかも、ちゃっかり普通に話してるし。
その理由を話そう。

少しばかり時を遡る。

此処は、数多くの村民が監禁を受けている地下。
目の前で、女性に説教を現在進行形で受けている『ディアボロス悪魔の王』。
その姿は、確かに説教には動じていない様子だったが、次第にどんどん折れてきたようだ。

「あゝ！ 分かった、分かった。
何かと理由をつけて此処にきた我が悪かった。だからもう説教はよせ！」

「まったく。次に何か問題起こしたら承知しませんからね！」
ハアゝツと大きな溜め息をついたあと、こちらを振り向く『悪魔の王悪魔の王』。

「しょうがないが、今回の戦いくさは見送りだ。
せいぜい首を洗って待ってい「違うでしようが！」「……すまん」

本当にさっきの妹と奴の雰囲気がぶち壊した。
恐るべき空気変換（KYチェンジャー）だなあの女。

するとその女が相手の前に出てくる。

「あ、ああ。その通りだ。」

我が直々に逃亡した雑魚を肅清して、暇つぶししようと思ったたらお前ら二人を見つけたのだよ。

何だ？ さっきのやり取りか？

王の寛大さと愚民への配慮を見誤るなよ『跳躍者』^{ジャンパー}？

我は一切、『世界を纏めし四人』以外に手を下す気など始めから無い」

「「「……………（怒）」」」

「まったく。この事件の解決は貴方様に任せますよ？」

「う、わ、分かった。我に任せる。」

……………『跳躍者』^{ジャンパー}、『天使の末裔』^{エンジェル}。

先ほどは、その、すまなかった。（チツ、コイツが居なかったら今頃は戦を！^{いっしょあーい}）

ただの暇つぶしでも、人間に危害を加えたのは王として謝罪する。詫びとして、この村の村民の処遇は私に任せてもらおう」

「な！ そんな事任せるわけ「良いよ」なっ！ アイ兄！」

「まあ、ソイツに任せるだけだ。でも、絶対最善の方法をしるよ王？」

「無論だ。では始めるぞ……………」

と、そんなこんながあつた。

で、今は村から帰っている途中というわけである。

キ
ャ
ラ
崩
壊
！

第三十七話 なぜ一緒に？（後書き）

感想待ってます。

誤字は、ありませんよね？

第三十八話 必殺滅殺大虐殺！（前書き）

遂に？の話数を越す時が！

第三十八話 必殺滅殺大虐殺！

今は、ギルドの待機していた馬車に乗って、その揺れを感じているところだ。

ああ、アイツ等も一緒に乗ってるし。

「まあ、王が居なきや犠牲者は増えるだけだった。そこは感謝だろ？ アリア」

「う、そ、そりゃそうだけどさ！

でも、ソイツだって今までに何度も悪事を！」

「我を犯罪者の様に言うな。

我は基本、他の人間には手を出さん。それは事実だ」

白髪の少年、いや、『ディアボロス悪魔の王』は、

妹の非難を軽々とかわしていく。

そして、更に向こうにいる女性が言う。

「そうです。この方はそれだけ（・・・）は一応守ってこられたんですから。

それだけは信用してもらってよろしいです」

まあ、俺もはつきり言うと思う。

現に、俺とアイツが初めて会って、戦ったとき、

俺との約束を守り、妹から攻撃されない限り危害を加えようとしなかった。

まあ、あの時は妹が攻撃してしまったからだけなのだが。

俺が思うに、多分だがアイツは、俺達とのアイツが言う所の『戦』「しあこ」の為なら、

どんな約束でも守ってくれそうだ。

まあ、あくまで多分だが。

「そうだ。おい『跳躍者』ジャンパー」

「何だ？」

いきなり隣から話し掛けてくる王。
言わんとしている事は予想つくが。

「お前はやはり強くなったのだろうか？」

いきなりだが、その『マスター』とか言う所のもとに帰ったら、
早速戦をしようではないか！「しあこ」

この戦闘狂。妹の数万倍酷いな。

つて、『悪魔の王』ディアボロス。ご愁傷様……悪魔にこれっておかしいか？

「だ〜め〜です〜よお〜？」

ちよつと、おはなししましょーか？

あ〜あ。

けどさ、アイツも懲りないな。

「なあ兄」

「んあ？ 今度はこつちか。何だ？」

「やっぱりさ。どうしてもアイツ等信じられねーよ。」

きつと何か他に目的が！」

「だから、な？」

それは絶対無い。俺はそう思う。

……まあ、アイツは俺達と戦いたいらしいけどさ」

「けどッ！」

「……………なら、お前が判断しろ。」

アイツをしばらく見て、本当に何か企んでるんだったらそれで良い。それはお前が判断しろ。分かったな？」

「……………分かったよ」

はあ、こっちの相手も疲れるな。

歩きも疲れるし。

……………ちよつと待てよ？ 悪魔なら、もしかしたら転移魔法使えるんじゃない！

「なあ『ディアボロス悪魔の王』？」

「なんだ」

「お前って転移魔法使えたりする？」

「…………別に、普通に使えるが何か？」

「……………」

「それ使ってくれねーか？」

「別にそれで良いなら良いが。」

「それでは目的地の座標をおし居たぜ！ 獲物だアツ！」……（怒）

「

何だ？

いきなり馬車の外から大声が聞こえる。

それでアイツの声が途切れて何か下向いてプルプル震えてるし。

俺は前の窓から御者に話しかける。

「なあ、この声は？」

「あ、あ、その、大量の賊が！」

震える声で言う。

おいおい、行きで出なかったから安全な道かと思ってたぞ。

「ふ、ふふふふ。私の喋りを阻害するとは、生かしておけん……。く、くくくく。おい、お前は此处で待っている。我一人で行く」

そう言つて、従者を止めて自分一人で馬車から出て行く王。

ここからは、外の声だけだ。様子は知らない。

「おい。この馬車が狙いで良いんだな愚民？」

「んだあこのガキ！ まったく騷がなつてねえッ！……？？？」

「ガキでは無い。王だ。安心しろ。これでも愚者には慈悲ぐらいかけるぞ？」

今すぐ医者に駆け込めば助かる傷をつけてやるっ」

「て、てめえ！ ばけもっ……ガアアああ！！??????」

「ちくしょおおっがっがああああ！！！！」

「ひ！ に、にげろっがははがaggaggああ！！?????」

「ふふふはははは！ 逃げ惑え愚かな民よ！」

「た、頼むから助けッ！」

「ほう。いい土下座だ。ならば良し。生かして……」

「ホッ」

「やるかああああああ！」

「ぎへッ！ へッ！？ dしふえああ smf…あ！！！！！！！！」

「ひょうぱ j f さ j f g s け！」

その他諸々リピート x 50 程度。

そして静寂が訪れる。

因みに、外にいる御者さんは、ここから見ると、泡を吹いて気絶していた。

「おいおいおい！ アイツ何して！」

俺は後ろに妹がついてくるのを見ながら、馬車から出る。
そこには、

「ふむ。これぐらいか」

傷は勿論、服に血の一滴も掛かっていないアイツがいた。
そしてその周りには血の海が広がり、（決して比喻ではない）
死体は一つも無かった。

「安心しろ。アイツ等はちゃんと殺さずにしておいた。
まあ、今頃は近くの街の医者がてんやわんやだろうがな！」

そして笑う王。

……何か不安になってきたよ俺も。

第三十八話 必殺滅殺大虐殺！（後書き）

何かこのままの進み具合だと？ - ？ができそうな気がする。いや、
？か？

第三十九話 『好敵手』対『師』（前書き）

マスターのリアルではつきりとした戦闘シーンって、
これ最初でしたっけ？

第三十九話 『好敵手』対『師』

「なるほど。」

こやつが『跳躍者』^{ジャンパー}の言うところのマスターか。

『世界を纏めし四人』でも無ければ、悪魔でも無い。
しかし普通の人間とも言い難い力。

……興味があるな」

「それはどうも。君は、悪魔……で良いのか？」

「ああ。我は『悪魔の王』であるディアボロスと言う。
して、『跳躍者』^{ジャンパー}は強く鍛えているか？」

「アイの事ですか。」

まあ、あいつは凄いですよ。もう自分のオリジナルの魔法を考えたらしく」

「そうかそうか。それは楽しみだ！」

マスターと『悪魔の王』^{ディアボロス}は、

俺とマスターと妹が住んでいる家の庭にある、

ティータイムの時に使う木の椅子に座ってマスターと世間話、もとい俺の話をする。

「っておい！ 何でそんな友好関係築いてんの！？」

思いつきり紅茶を飲みながら、

この街の戦力代表みたいなマスターが悪魔と談笑って、シニールだめっちゃシニールだ！

あ、因みに言うのとつくに家に帰ってきた。

ギルドに行き、俺と妹のギルドカードには、

『男爵級悪魔討伐』の記録が記され、更に妹は一気にEからBに上がった。

俺は変わらないが。

それと、『悪魔討伐』というのは滅多にできるものではなく、悪魔の殺し方も全く不明になっているらしい。

その『撃退』という依頼を『討伐』という形で達成したので、ギルド本部から依頼料の更に二倍近くを貰った。

これで金も稼げて一件落着。

しかし家に戻れば、

なんと『ディアボロス悪魔の王』とマスターが談笑しているではないか！
さっき見た時は驚きすぎたよ。

しかし、マスター曰く、「この悪魔の王は人間には危害を加えない、常識と理念をもった悪魔だ」

との事で、やはりマスターも気にしていないようだ。

「では、一戦やりますか？」

「ほう。人間の身にして悪魔の王に勝負をかけるとは！
面白い！ その勝負乗った！」

「え？ はい？」

え、ちょっ！ なんてそんなんに為ってんのさ！」

「アイ兄の言うとおりだ！ 何でまた戦いなんて！」

するとマスターは手を肩まで上げて、ヤレヤレと首を振る。
そして『ディアボロス悪魔の王』は、

「安心しろ。この街の人間や建物には一切被害を与えないし、
万が一も無くとも、我はお前ら以外の人間は殺さん」

「そうだぞアイ。それに私ももうそろそろ訛ってきてしまっている
からな。」

偶にはこういうのも良いかと思ってな」

「まあ、マスターとやらも同意しているのだよ。
地下があると聞いた。そこで戦やろう」

「ああ。では着いて来てくれ」

マスターは『ディアボロス悪魔の王』と一緒に地下の部屋に向かってしまう。

「おいおいおいおい！ いくら緊急転移魔法があるからって、
あの二人がバトるとやばいッて流石に！
よし、アリア！」

「な、何ッ!？」

いつもと違う様子に妹が驚く。

「もしもの為に俺達も逝くぞ！
……違う！ 行くぞ！」

「あ、ああ！」

地下の部屋に急いで向かう。

そして地下の部屋に着いて、

その扉を開けた瞬間、

「グッ！」

「うわっ！」

突風が吹いてきた。

続いて聞こえるマスターの詠唱。

「風の精霊、我に答えよ！　そして風塵を散らせ、その身を天に飛ばせ！」

『ミストラル・ダウンバースト』！

瞬間、下から上にかけて突風が吹き、
『ディアボロス悪魔の王』が浮きあげられたと思うと、

さっきの何倍も強い風が上から下に吹き、
アイツの体を地面に叩きつける。

「ぬうッ！　まだまだだ！」

現世に存在する根源に宿りし全ての闇よ！　我、悪魔の王に従い、
敵を鎖くわせ！

『ブラック・コフィン』！

瞬間、マスターの四方八方から黒い闇でできた、ギロチンの刃のような鋭い刃物の壁が、マスター視認できなくなるくらいに、文字通り、閉ざした。

そして直ぐにそれが開かれる。
中からは血まみれのマスターがでてくる。
しかし、

「ぐっ、まだまだあ！」

マスターは直ぐに体勢を元に戻し、戦闘の準備に入る。

その率直な感想。
妹と俺は同時に、

「「凄………」」

眩いていた。

第三十九話 『好敵手』対『師』(後書き)

COFFIN
棺

第四十話 話の始まり

「ハアッ、はあッ、はあ……」

「ふ、フッフッフ。流石、と言うべきか！
我をここまで追い詰めるとは！

もし貴殿が我と対等の魔力量を保有していたならば、戦況は分からなかつただろう！

やはり貴殿には『跳躍者』^{ジャンパー}の師としての器があるようだ！
気に、気に入ったぞ！」

「はあ……ハア……そ、それはどうも。

私ももう魔力切れだからね。良い線行つたとは自負してるよ。
それにしても、悪魔の王に認められるなんて光栄だな」

俺達の目の前には、勝負が終わって、

地に膝立ちで、疲れきった顔をしているマスターと、
その正面に、いまだ威圧感のある表情で立つ『悪魔の王』^{ディアボロス}がいた。

そして今は、強者らしく相手を認め合い、
仲良く話している。

ほんの数十分だったものが、
今では何時間もかかったのではないかとも思えてしまう程の戦いだ
った。

まさしくそれは、『闘い』ではなく『戦い』だった。

この二人だけでも戦争を引き起こせる程の戦力を見せ付けられ、俺も、横にいる妹も、自身の未熟さを思い知らされた。

「……なあアイ兄……………」

「何だアリア？」

「……私、もっと強くなりたいよ。」

そしていつか、絶対にアイ兄を越えて、あの二人も越えたい！」

「ハハッ、お前なら本当に実現させそうだよ。」

……………そう、だな。

俺達も、もっと強くならなくちゃ、だな」

妹と視線を交わし、お互いに意思を確認する。
するといきなり、

「その二人、ちょっとこっち来なさい」

マスターから呼び出しがあった。

俺達はマスターと『ディアボロス悪魔の王』のところにいく。

「よし。話があるんだがな……………」

「なんですか？」「なんだ養父さん？」

「いや、それは我から言わせてもらいたい」

『ディアボロス悪魔の王』が横から言ってくる。

「ん、まあ良いですよ。じゃあよろしくお願いします」

「ああ。」

我と貴殿で話し合ったて決まった事がある。

それは、我と貴殿で、『跳躍者』と『天使の末裔』、
お主等二人の訓練をつける事になった」

「「え……………」」

「ああ。言い忘れていたが、二ヶ月ずつの交代制で、我と貴殿の両名から訓練をつけてもらえ。

以上だ。我直々に修行をつけてやろうと言っただ。光栄に思え」

「「え、は、はああああああああああ！！！！？？？？」」

その時、俺と妹の思考がリンクした……ような気がした。

（（コイツ絶対何か企んでやがる！！！！））

「別に我は企みなど持ち合わせておらん。

強いて言うならば、これから来るであろう、『救世主』との戦いに
向けて、だろうか」

「え？ 『救世主』って、もしかしくなくても、『世界を纏めし四人』
の一人？

何で俺達と戦う事前提？

というかその説明をして欲しい。頼む」

「……………」

「……………」

「……仕方無い、か。」

この真実も、いずれは辿りつくもの。今のうちに話しておいた方が得策か……。

……………良いだろう、我から話そう。貴殿も聞いておけ。その為の試合だ。

では話そう。『世界を纏めし四人』。

世界の歪みを正し、神にのみ従う者『メシア救世主』

世界を混沌に落とし、悪魔の頂点に立つ者『ディアボロス悪魔の王』

異世界より召喚され、善にも悪にも成り得る存在『ジャンパー跳躍者』

世界に光を宿し、天界に住まう天使の子『エンジェル天使の末裔』

この四人の運命は、

遙か遠く、何処か分らない、何時か分らない世界で、動き始めた……………」

第四十話 話の始まり（後書き）

遂に！

第四十一話 『世界の真実』

「……事の起こりは数世紀前。
いや、我でも知らぬ、

この世界の誕生した瞬間、それは起きたと言われている」

ゆつくりと、いつもよりも神妙な面持ちで話す『ディアボロス悪魔の王』。

「世界には、『意思』がある。

その『意思』は、人間、悪魔、動植物、その他自分の下位に有る存在の

運命を御し、誕生、消滅の時、その根柢まで制御した。

だが、その『意思』は、何を思ったのかある日、考えた。

この、退屈な日々。

生命を生み、その運命全てを操り、そして消滅させる。

この均衡をとるための単調な作業。

それに、ある考えが加わった。

『意思』は、この退屈な世界
自分自身
に、
ある刺激を加えようとした。

それが、自分自身を御す事のできる『生物』に、自分自身の権利の
覇権を争わせるもの。

そしてそれは、直ぐに実行に移された。他ならぬ世界の『意思』に
よって。

その『意思』の狂喜から出来た、この世界で最大、最強、最狂、最
凶の『生物』。

それが、『世界を纏めし四人』。

そしてその『四人』には、それぞれ『役割』が振られた。まるで本当のお遊びのように、な。

『救世主^{メシア}』。

この世界の過去に、全ての人類の命を救い、
そして現在^{いま}のこの世界に召喚された、正に救世主。

『悪魔^{ディアボロス}の王』。

その時が来たとき、突然変異で悪魔の間に生まれる、
全悪魔中最狂の悪魔。これはほとんどが王になる定めだ。

『跳躍者^{ジャンパー}』。

元々は異世界に存在しているはずの、
世界にとつての不規則。四人の中で唯一、魔法ではない力を持つ者。

『天使^{エンジェル}の末裔^{ディアボロス}』。

『悪魔の王』と同じように、天使の間に生まれる、
全天使中最高位の力を持つ天使。

しかし、神より大きい力を持つものは、地上に堕とされるものだ。

そして、その『四人』の中で、格が違うのは『救世主^{メシア}』。

その経験豊富な戦闘能力と、世界に住まう人間を救った力。
更には、他の三人と違うところがある。

それは、

『一個体』だからこそ、何度も、何度もこの『覇権争い』に参加できる狂者。

『救世主^{メシア}』は、世界にいる人々を救うために、永遠の命の呪法を体に刻んだ狂信者だ。
そして、『救う』ために、世界の不規則となる、我々三人を倒す為に動く。

まさしく、人間のために動き続ける者だ。

話によれば、過去にも幾度か、『四人』の戦いが起こったらしい。その結末までは、我でも知らない。

……そして、今回の、世界の『意思』による『お遊び』の『お友達』に選ばれたのが、

……我々だよ。現『跳躍者^{ジャンパー}』のアイ・M・ウィルドレース、現『天使の末裔^{エンジェル}』のアリア・M・ノーヴィス、そして現『悪魔の王^{ディアボロス}』をやっている、我だ。

そうだよ。

我々は、道具だ。

我儼な子供に適当に買われて、適当に捨てられる、

儚い存在なんだよ」

第四十二話 『涙』、それは嬉しさ故に（前書き）

これで、？は、終わり。

第四十二話 『涙』、それは嬉しさ故に

ドガッ！

と、壁から鈍い音がして、自らの手からも血が零れるが、構うか！

「何なんだよッ！ 一体何で俺が、こんな目に！

世界の『意思』、『四人』！

ふざけんじゃねえ！ 俺は俺だ！」

ドゴオア！

更に壁を殴る。

もう左手に感覚など残っていないが、また振るう。

世界の『意思』に振り回されて！

その為だけに、俺は！ 俺は！

紫を！ 悲しませている！

皆を！ 苦しませている！

「ちくしょうがあああああ！！！！！！」

「アイ兄……」

「……『跳躍者』^{ジャンパー}、『天使の末裔』^{エンジェル}。

今、我が話した事は全て事実。

だが！ ここで悔やんでいたとしても『運命』は変わらん！

いずれは、狂った『救世主』^{メシア}との戦がある！^{いくさ}

その為に、我らは強くならなければならんだ！」

『ディアボロス悪魔の王』は、珍しく必死に俺に対して声を張り上げる。

そして妹……………アリアは、俺を見つめる。

「……………なあ、アリア？」

「な、何？ アイ兄？」

「……………俺と、こんな、俺と会って、兄妹になって、それで、お前は幸せか？」

こんな世界の『意思』に振り回された挙句、
会わなくとも良かった人と出会い、そして兄妹きょうだいにまでなってしまう
た。

例え世界のせいだとしても、俺は自分が許せない。

こんな、振り回された事を自分でさえ気付けぬまま、
アリアを巻き込んだ。

「もし、もしも俺と関わる事が無かったら、
アリア、お前は、幸せだったか？」

「そんな事無いッ！」

即答。

それが妹、アリアの、俺に対する答えだった。

「私は、独りの時に、アイ兄に会えてよかった！
私は、もう寂しくなくなった！」

例え、誰かが私達に関わってても、

私は、アリア・ミカミ・ノーヴィスは、

絶対に、兄、アイ・ミカミ・ウィルドレースと、

出会った事を、後悔なんて、しないっ！」

頼に、何か流れる感触がする……。

長らく、元の世界で流したっきりの、ものを。

「……………そう、か……………」

そう、か。

な、ら……………、俺も、

俺ッ！ アイ・ミカミ・ウィルドレースはッ！

例え、何が起っても！ 誰が敵に回ろうとも！

決して、妹、アリア・ミカミ・ノーヴィスを！

傷つけさせないッ！」

妹には、俺と、

同じものが、流れていた。

お互い、我慢して、耐えてきたもの。

『涙を……』。

第四十二話 『涙』、それは嬉しさ故に（後書き）

短いでしょうが、

次からは、？の二期突入。

因みに、間隔は空かないと思うので、続編ではなく、続話と思ってもらって結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475n/>

In The Material ?=? Another World

2010年10月9日18時50分発行